宵話第一編

1 5
1459

門 15
號 1459
卷

一宵話第一編

昔天孫瓊瓊杵尊開耶姫一夜而懐子玉孫不信雖男子女
婢童女君一夜而懐子天
皇不信信之信也疑之信也
是以一夜所為神胤不

早稲田大學図書館
昭31.9.27受
藏書

信況学人。毋令枕戈
編集於一齋。談不忘宣
手雖拙。願之於学本手。
枝葉枝葉花實。
成在久。故寄引補録則須
三日三日不得。別須五日而謂

一齋者。須臾也。自是
後。一夕一編。二夕為編。筆之
武陽也。則毋聽者。記
不歇。

文化庚午正月

長谷川蔵書

目録

草薙神劔　附　玄上琵琶
日本の刀　唐の紙
東方日出處　蝦夷
蝦夷海獸　鴈の故郷
酒泉　和歌感應

一宵話巻之一

尾張　牧墨僊　輯梓

草薙神劔

神代に。素盞烏尊出雲國簸乃川上なる所へ降まし坐しし時。頭も尾も八ツにさけ。身には檜木榅木を生じ。その長さは。八ツの谷にはびこれる大蛇。國の神乃女を呑んとぞまもりて。尊怒らせ給ひ。十握劔を抜き。その大蛇をすだ〳〵に斬り給ふに。中なる尾にいたりて。御劔の刃すこし缺しかば。怪しと思召して。御覧ずれば。大蛇乃尾の中に劔ありし。いと奇しき物。我が私に用ふべきにあらずとて。

天上へ登せ天照大神に献し給ふ。是を名付て天乃叢雲と
いふ。後に草薙剣とやんに号す。又大蛇を斬り給ひし十握剣。一名を
大地の荒正といふ。後世大刀鍛冶の名工。正の字多きハけなり。その後
天照大神皇孫瓊々杵尊をこの葦原の中国へ降し給ふ
なる時。八尺瓊曲玉。八咫鏡と。此草薙剣とを賜ひ。吾を
齋しがごとくいつくしき敬し給へ。三種神器と申奉りて。
天津日嗣乃御三宝となる。是なり。天照大神天岩戸に
隠れ給ひし時。彼神の作り給ひし。鏡と。天照大神天岩戸に
隠れ給ひし時。彼神の作り給ひし。鏡剣を神勅に
八尺曲玉乃古と見へぬ故。二種乃神器なりと云事説も
有。人皇第十代崇神天皇乃御時。鏡剣乃神
威をうしなふ。同じく御宮を齋き祀せる。
憚せ給ひ。敬して遠くし。大和の笠縫に御宮を建て

古語拾遺の文に鏡剣を神璽とすと

移し奉る。別に石凝の神。目一箇神の。子孫陽明門の時に。
作りてばなり。又祭主神。以天目一箇神乃
一箇。神為作金者也。又云云。御商の人達に勅して。鏡を
鑄。剣を造る。禁中に齋き奉り給ひぬ。是より天子践祚の
御時。譲受け給ふ。鏡剣。この時作り給ひし。
沈し。七日刻なり。八尺曲玉。天より下り給ひ
又鏡の事。伊勢に祀る。彼天照大神御手にとり。譲り給ひ。鏡
剣。十一代垂仁天皇乃御時。倭姫命に授給ひ。
今の伊勢の大御宮へ移し。鎮座なし給ふ。景行天皇
乃御時。熊襲。叛き。東国騒動する。日本
武尊大将にて。東夷御征伐。その中途。大神宮へ
詣で給ひし。倭姫命に度は大事に詣給なるとて。此

鏡剣は別殿より出る。曲玉は三宝を軽重の物なり

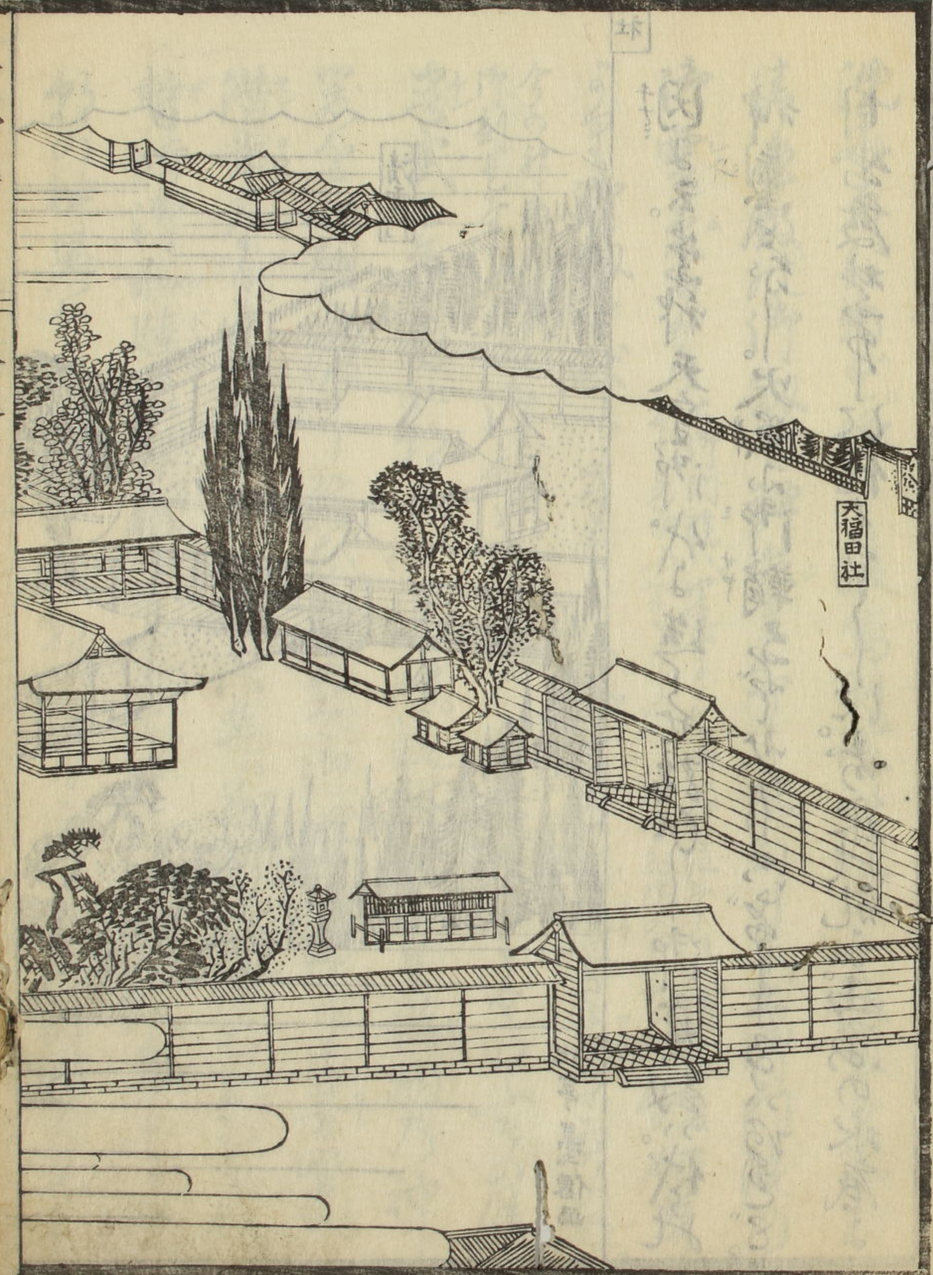
天叢雲の神劔を授け給ふ。尊駿河より下り給ふ。
國の荒ぶる神を尊と平らげ給ふ。曠野に猛き火
あり。四方より火を放ち焼き来らんとせしに。神劔
自ら抜き出て。草を薙ぎ去りしかば。忽ち御身を蔽
なく。難をも逃れ給ひぬ。此時より草薙の御劔とは申す。
此はは。古事記に。相模の國にあり。又尾張にもいふ。相東夷とも
平らげ給ふ。御凱旋の時。尾張の國造建稲種命の妹宮美
姫の許に忘れ給ひ。宿り給ひ。此劔を生所に預け。近江路へ赴き給
ひ給ふ。やがて薨じ給へり。よりて此御劔この尾張國
熱田御社に鎮座ありしなり。是は説あり。別に詳しく。その後

天智天皇の御時。新羅國の悪僧道行。新羅の伝あるべし。日本紀に見えたり
熱田舊記に載せ
たる説をつゞめ御社に十日の間法樂し奉る。此僧
迷なく御劔を竊出し。己が國へ持ち行き。筑紫に
入る。神劔いかゞせん。道行目盛れ。去る法師
方角うしなふ。忽ち盲る。祈しるし。社人に神劔の見えざ
ればなり。此法師の所業なりと。
追かけ取かへし。めでたく還御なし。せ申。ちなみに遠國に
鎮座ある事。齋慮やまゝ。上代のごとく禁中に
十二三年ばかり。齋き祭りし。天武天皇の御時。
海さへ熱田へ遷座なし奉る。抱の陸奥にある事なりといふ。抱の後元明

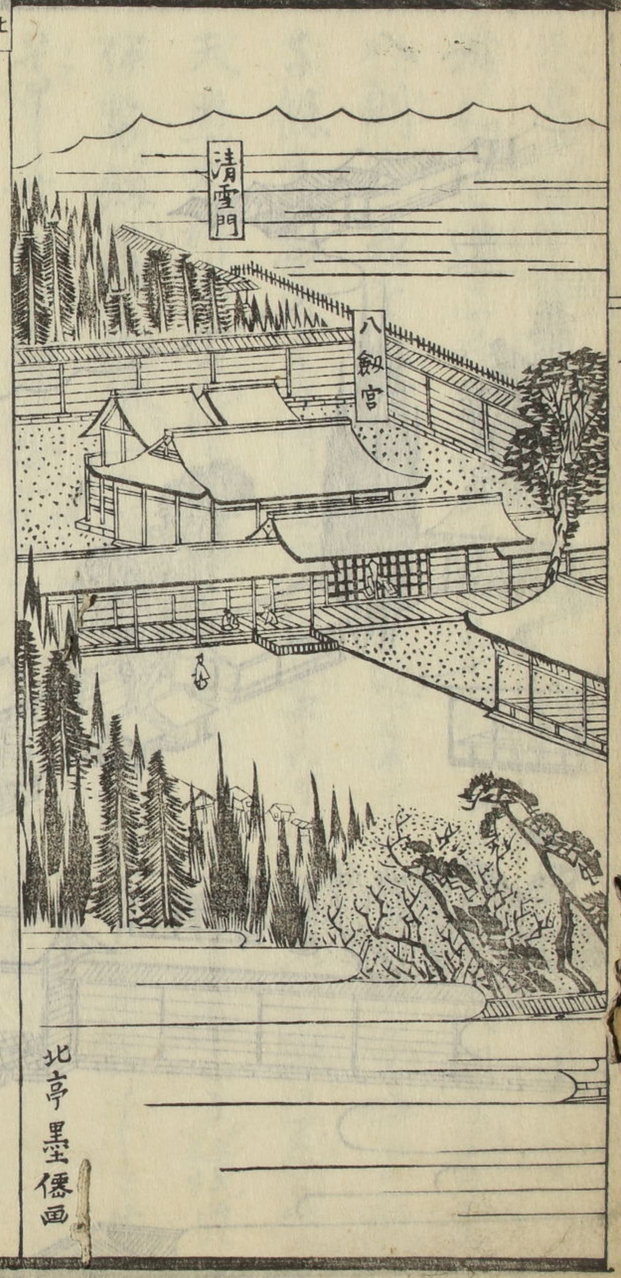
此を下宮といひて素尊の和魂とぞ
まうすなり

天皇れ和銅中。宸襟なやましき安らぐしぬやあり給ん。夢み神劔と造らせ。本社の傍ら別社を建て鎮座ある。今熱八劔宮是なり。是ハ別ち海まへ是よりして今ハ至ぶまぐ。
子孫奉ぶれども。神動座ある事なし。抑其の神器ハ。
天照大神御手ずから授ひ給ひ御形見なるゆ。鏡ハ
伊勢。劔ハ尾張。二ケ國相並ぶ鎮座ある事。奇〻妙〻
なり。いとんうるし

姑ふるをいひ自慢い。今ハ天子の御祈ハ三種の一なり八坂



此邊御本社



因よ云。崇神天皇御代よ造せられし御寶劔ハ代々神璽とす。火災ハ御鞘ばかり焼ぬ。月出度梦中に傳たるし。寿永の乱よ西海の水底よ

沈み尋ぬ出ず。依て後鳥羽院ハ後二十餘年ばかり。清涼殿ハ御劔を神璽とす。土御門院乃御靈夢のうち古御門院ハ。宮家にて御即位なれハ御璽夢ばかりなり。後ハ鳥羽院のよう夢ばかり。伊勢ばかり見るべきなり。

よ御劔を献じ奉りしかど。そもそも後齋宮ハ。今の神璽乃御剣見なり。ハの御劔ハ。夢通乃前兆なるもやいふ。その後建武三年。南朝ハ敗北なる時。後醍醐天皇偽物乃神璽を北朝へ渡し。弥々。真のを御携へ給て芳野へ潛幸なる。尊氏南朝正平六年。足利殿降を乞れ。暫時御和睦乃言。勅使を以て中院具忠入京し。偽の神璽を請取て南朝へ帰らるゆまでハ神璽を

偽物なれば。璽ノ匣ども。捨てせ。神璽は近侍の人ふ
賜ひ。素戔嗚の太刀。草薙と名付られ用ゐり。是ふ
北朝文和元年後光厳院の御即位ありし。三種の神
璽を失なり。その後又南朝文中九年。南御和睦
調ひ。神璽ふ奪へかゑせ。初ふ嘉吉元年に
南方の軍勢ふ。小野の内裏へ攻め入り。三種の
神璽を奪ひ取り。神璽は芳野へ移ゑり。
神鏡は黒田某ふ取かへされ。神剣をば清水ふ
捨てり。れを付て捨てりとて。柳黒代の御寶蔵ふいに
発ゑられば。寺ふ堂前ふ捨てり。物騒ふ又偽

此頃の三百文ハ今ノ
いくらふ
ゆくん
豆利の
米ふ米
ふ石と
四五百
文商ひ
ふ米の
初大仏
建立の
時日雇
賃十六
文増て
十九文
ゆひを
一湾ずつ
とりふ
いたし

物なれば。ふ小野ふて一日三種の神璽ふ安ふ
ふの役。素戔嗚の太刀ふせ。ふも物騒なり。又言上の御琵
琶を毎日三百文ふ質物ふ。ふも物体なり。是ハ文
保年中ふ出ふ如ふよ

附タリ言上琵琶

ハ言上ノ御琵琶ハ。鏡剣の類ふてあるね。天子黒代
の御寶蔵ふて。中殿の御厨子ふ置れ。ふ不浄の
手を触ふ。ふ孫ふ。て病る人あきハ必ふ重衣の人
ふ取ふ。ふ孫ふ。ふ孫ふ。ふ孫ふ。ふ孫ふ。ふ孫ふ。ふ孫ふ。ふ孫ふ。
霊物なりとぞ。ハ琵琶一下せ盗人のふあに取ふ事ぬ。

永の字そへハかけふん時價ハ定かならうし

しかるに今年（文保三年）五月十六日に出現せり。そのゆゑハ七條の玄海法印の許に三百文の質物におかる。一倍の後紺將入道八百文にて買とりて後伊豫の國の住人志津河右馬尉二貫文に買ひ。琵琶造りに出しまゐらせし。ほどなるに琵琶造りて取りて鷹司殿に進ずるの所。玄上なりとあらはるよし聞え出されて年ぬ。其後九條殿に進じ年ぬ。九條殿より西園寺殿に遣はさるるに。玄上九條に細かきのありけれ年ぬに依て官人章房志津河紺將おて搦め捕りて年ぬ。玄海法印をも武家沙汰としてかりて免ゆるさる。是によりて官人章房勸賞あるべきよし其沙汰ありて院宣を下し賜ひ年ぬ

玄上事。傳自唐朝之海。備朝端之靈寶。至于延和五暦。於梨本令紛失。當代之始。不被圖神宴震襟之底。尤所思食也。而糺彈玄上之所犯。誠白波之凶徒。雖盛聖代之德化。當非追捕之殊功乎。偏是依叡感之至。宜被行不次之賞。以此趣可令下知官人章房給者。院宣如此。仍執達如件

五月七日　　室房

謹上　別當殿

其の季の末かかる渉りしきるも所まてかある物なり。

物のみならず。賢人才子の時に逢ざれバ下寮に沈み漁
樵に隠るゝも同く。又顕はるゝも同しかるべし

日本の刀

我國の刀剣を外國人の称美する事むかしより多く。
欧陽子が宋代の文人日本刀歌を作れり。又日本刀ハ極
めて鋭利中國ハ及ざる物なる事。又備前刀を上とし（蒼霞艸 武備志等）
又日本刀陣日本刀閃爍（神器譜）などいふを見よ。人の生血を以て
淬ぐ物なり。（南詔の浪剣ハ馬血を以淬といふ）又十年寒冽の井中へ沈めて拘
なりといふハ奇しく好む餘りの虚稱なり。（明人の詩句）そら事に
清人張若采が日本刀歌に白日所出金鐵流錬之性剛金性

（和蘭刀も剛柔種々ありて鎗のやうにつくれるもあれど大抵ハ大抵と云ふなり）

柔鐵為寶刀䤾屈伸屈以防身佛殺人と作れるハちと
疑はしきいひ様なり。是ハむかし和蘭陀の刀を我國より傳へ
するがゆゑにそれを見て海外へもわたりしもあるならむ。想ふて欧羅
巴洲諸國の刀は。（フランス。ラランダ。ムスコビヤ等）鐵性柔にして身をうすく鍛へ
物あたりて屈めば環にすれば半月の形になるハ池北偶談にも
見ゆ。これのみにて和蘭刀を度々試みたり。（日本刀もなんせん一文字などはあるかのうち）
召して挟みし時輪になりて歪しかりしより名字して云お劍のうちの
なるはだん〳〵に立て行ものなり。是ハ身うすく鍛ひのよきなるもざれども
和蘭陀刀の折らりハなし。此なんせんハ猫切丸の南泉より美名なるか。人の身中へ刺入て骨を截る
適ひ要とせるよしなれども和蘭陀刀と雖とも且に
日本刀をもて打さバ昔をなくならしめる事なるべし。

試みて知るべし。正保の初め、唐人林有官といふもの、ふ歌
長崎にて改名し、長崎にて住し、我國の刀を買ひとり、
唐土へとり渡さんと謀りしが、那を捕らへ、とりやめ、
新羅の悪傷などにそなへ、あまたあきの巧するものをあまた
あつめ、なほ、我國の人乃癖ふかく、唐の物をぞふいへど絹
一寸、糸一筋をも、かるふ、刀の事は好む人をまきこと沙
汰せぬ。人は律義なるをのおの
因よ云、魏の性ふ剛毒なれば、水の性なりも美悪あるハ本
よりふかく、蜀孔明が刀剣作りするふ、同じ國内にて
もつ、流の緩急ふよりて、刀剣ふ利鈍あるよりを論

元ゞいへり。拙るふ我國もく刀剣造るふ、其人其家の
秘伝にて、湯加減ゞいふるハ様々あるよりなれど、
いづこ乃河水はなるべく、生河魚ふ集まりて、源治ハ
せざ。是い我國乃水はなべく剛烈なるゆへあらん。或人
云、水の性の事ハ古へよりのいひ伝へ。唐人のやくハ中ハ嘉の堺の畑外庵了源ハ
の源流ゞ大坂へ来りて作りしが、水性よりく出来ぬ、といふなり
よりて名剣乃自生する、ハ唐人を論あり。鉄唐乃
聞人紹が家乃寶剣は、刀を入まきく底ひもとゞ。
鉤のごとくなるもの、維てゞ鯉魚を釣りたるごと
なる事、弦の如し。関中の種鍛も一剣後
高ふ。底もゞ盒中ゞ重りて出せゞ本のごく直なり。

張景陽が七命といふ文に名飯のうと餅碎無方。
といへり。是もうとりたれば一類なるべし。唐
の俗もく作るを物是あるべし。唐人のいふ
又よ。漢ふ常に物ゆはなぬなりしも

唐紙

刀のこと。ところ〻に紙いもうたれば。かもやりそす
せ給ひしより。源氏の物語ふなる紙をれば。むらう
やも給うりしに。我國の人唐の憲障子いうなる
物をてもに。大方ハ紙れ繪ふ〻ものとなり。紙窓を
いふ事を又えまさ別ふ。唐方ハて書院といふもの、

紙ふ。ようしきを作るもるが如まる。大内の書用ま
糊窓紙と遣らむ。名を檀紗紙といふ。又績人
院元ご日本の書物を諸紙本とるけるふ。ようべ如ること
ふもを赤やもり濃紙紙の物作もるなり。濃をなとと唱
といふ影ふり。英濃紙のようなり。直をのふ
英濃紙は。延喜式ふもを見ゆ　落い。水衣也。苔也と。註〻く。
苔草の類と又ゆ。方ふ〻を草ふ〻作まる
かを知ふ。唐の玄宗日本紙を以て。親王達へ分ち給ふ
しハ。今は檀紙乃ま如なる。昔繭紙とふ物を。唐の王へ
又ゆ。繭紙一名松皮紙といふ。檀紙ふり氏紙を引合せ作るもいふ。唐書も
うこと。紙を引合せ作るもいふ。何をゆもせよ。唐方のいこと。
うこと。ようきに張ひなり。近年三ッ草ふとふもの

浙中の稲稈紙と云ハ稲わら
陶紙の八海苔ふ〻
遠ふ山と苔紙といふ

迫来唐紙を我國にうつして作り出す事なり。唐紙とは紙の名なり

且て唐紙よりもろく造らんとすれども。國もれ性い急ふ改めがたし。迫来唐紙作の麦稭の影を彫作の唐紙にうつして。仕りし程なれど。機巧の眼力をのがれがたし。又雲龍菜をまぜる事なるとかやう

因よ云。外國の事を強ぶるふ。何ぞ強國。何れは弱國とさだすれば。是ハ弱きを強ぶる君と將たるの。常に心りけよる事なり。朝鮮のごとく負けしハ。三百年れ太平よ。下油断し。政務も武備も。醉夢中なりし所へ百錬乃強兵攻入るしかり。富貴なれふ一ものもなすはしなるそれ懲り用ゆれば。又強國となる者なり。先達いたきし。實よ強弱ハ君と將たるよりの事なれど。琉

日本ハ東方なるゆえ強しといふ。日本ハ東の風ハ吹き強きゆえ。強國なるべし

球ふ強將の出しを始を空なるハ兵強將乃出ざる。即弱國といふべかられバ國よ強弱なるとい云それぞ是ハ紙よても知るべしなりいづれも強國なるも。是將の力強き角力人のまを知るで。おのがちからを出る也用じ。是ハ海を道理も理屈もなきなるで。但あるまれきハ賢明の強將なり

東方日出處

日本人の強きハ。東方太陽の精を受るかゆえ。いふ。うけるを吸ふ。或人是ハ水の性よりなり。琉球の水ハ柔よ。朝鮮の水ハ鈍く。日本の水ハ剛烈なるゆえ。是ハ通ふ。遠ふして理あり

普天眞國王天竺の都國

東夷ハ性柔順なるゆへ。倭國と唐人の號せり。倭は順なる貌之といふ

唐土の天子を称して。東方日出處大世界田地主なく
いへば。唐人も亦朝鮮を称して。艮方日所出。朝は朝
夕の朝。鮮ハ鮮明の鮮。朝日出而晝界鮮明の意なり
と云。是ハ朝鮮ハ本水名にして字音にかゝはるまじとよりの説なり　朝鮮人ます〱我が
皇國を称じて。扶桑日出邦などいひし事かぞ
へがたく多し。是いはれこそ日の出る所とせんとし
此所より東に國なきゆへ。詩文の雅業せざれ。それを又日
出處といふ成し。東西に定準なき證バなり。日本ハ
大陽精華の萃る所なり。故に其男子ハ年五十を
こゆれバやがて陽精衰ゆるゆへ倭奴國と名付く。倭は痿

説ハなし又倭亦と倭奴國を別に倭奴國ハ一小島の名なといふせ[illegible]ず。此は[illegible]お論る事し

なり。奴ハ儂なりとして唐人乃評せしハ口から出次第
此誤語なることいふを。時に一人知命の子。吾輩義益此
ん得ゆゑ妙論とこそおもひしといふ。いへをなし
此説によらバ。ワヌ國ハあらで。非ヌ國なりとかな。然らバ唐人の日本人は
足下の國は何處ぞと向ひし時。日の出る方ハ我が國なりと答へし
をこう和伽國てふとて。倭國といひしと云ハあしく。身の短きゆゑ
矮奴國といひ。倭矮音の通ふなり。倭の字をかうまじといふ
諸要ありしきらふ。エゾ人。さづから其國をカイといふ。カイとんいかなるなりや
去しきゆゑを。髭の長きゆゑ蝦夷の字をかましたりと。エゾ人申さバ。
んかまくなのよ
まじ

蝦夷　カイは所の名。エゾはえぞと同じ語なるべし。然るハ。カイノエゾといふ所なるべし
むかし安部貞任宗任父頼時奥地よりおわり國あるすと云。
其所を我物にせんと子弟郎黨引具して職して彼地へ押

善光寺ニ沒悟津輕の法君鞍男を鞅鞨へきはされしを。今の稚そ。リウヤル後海して沙しとぶ。わろし。故しこの名すらは。いまも今無さし。

渡り大河で三十日程ながき里をへまでずべて無人の地なりしに。
峨々たる南山嶮しき胡人千騎計出来て。彼大河のそこ井もしらぬ淵を。
るゝて昔をかく渡りし杖をつく膽を察して帰りしといふハ宇治
拾遺に出て。定かに蝦夷國とハあらねど。げに必西蝦夷地なるべしと。おも
そるゝ之蝦夷人のるゝよ云ふるゝかくれたり。此語る人を故人とハ云ふよりの也 東方ハエドロフ島を深く入るとも。おこ
騎和遠べきよしなるれば。げに大河ハ西方のイシカリなどふやあらんか。
拾遺の此とさ。蝦夷島ハいまく到らばこそ。今のやうなるにハ知らし。文然に此物語を宗任法師よ直よきゝれしとも。ありくもぬ押して究め海路出船の事もいくおぼろ 体をど
イシカリ分先も稍蝦夷地なれバ。故語ハいかにして来りたらん唐太の地方ハ。
山丹満州へ住だなど 韃靼よても。蝦夷よくし。否さんれ其をシヤムといふ。此シヤム乃同稽なるよりて。地續きなるらんとおもへど。為海を隔てゝ。唐太の西の島
ナツコと云所の出埼より。山丹へ海上十里計離るといふ。
是ぞふ又ぬ小湏之此國のすあれバ。定ハ知らし　是あるらんれとといふ人ありけれどさや

まづくするれとくすへて花ハ實中と云ふし開くそ。

より唐太へ海上舟路凡十七八里直径六七里ほどにて。此大河のすハ右にも左にも
覺束なし。但日本人の津輕南部の海を越えて。蝦
夷地へ入りしハ。此頼時や初めなるらんか。此已前にも。將門叛
逆し。弟の將平に。正月一日をもて。討取渤海國。攻東丹國。領掌ヘり。
といひしは。大膽なるすり。渤海東丹ここな蝦夷乃かなすれ
むかしアツケシ乃酋長イトコイといふ者。遥よ東ふの
島へわたり。夥く漁獵し。其魚を乾して持帰り
こうら其魚をカンシヤケ魚と唱へしといひ傳ふ。蝦夷の語よ。干魚をこシヤツケ
ともサツケともいふよしなり。鮭ハ今ハカムサツガ。カムシカツトカ。
シべなれた。干魚のおよ。シヤケといふ 加模西葛杜加。
カンサツカ。カムシヤツタエ。カムサスコイなどく精しからよし
或人いへるごと其本を審ならず。又山丹ハ蠆夷丹の

地名して。遼の本國契丹の種類なるゞ。山より深く住めれバ。山丹といふ。山越山戎。また生女直熟女直の類。例あるとく。同一種類とも分けて名ぶたしあるとや。山ふ住うゝ山丹といふハ。サー唐人らしきいい振なると或ハ東丹の轉じたるゝ。多濃耶國の所生なり。真國ハ倭國の東北一千里よあるとといふ。中古の遼ハ又山丹夷の人を。韃夷人キタイチンといふ。これを漢人カンジンなりんといふ人あもてや。やはり契丹人なりゝ。又東北ふゴロヲタラハンといふ所なり。是は大韃而靼なり。即ヲゴロ人も同じ。モンゴルは蒙古國なるゝ。ラボツコイは。渤海ボツカイあるべくゝ。或人ハ。まぐそく外國乃

中古ハ東ハ新羅ハ渤海ハ新羅の地なきゆえ文義。ありしが契丹ハ傳しゝ東丹ハ後名して契丹軍名貢獻ゆう

名どもを沙汰するハ。前條よ舉ゝる痿儂のまぐ多き物なると。普魯社。俄羅斯ハ。一音の轉ぜる根ゝ。清人ハ差別せずハ。紅毛と喝蘭を別種ありと舜水先生ハ。日本と倭とを。舊唐書等よ分てるも同事なるもされど清人荷蘭の人物ハ。俄羅斯人よく似ゝりといふ。ハ。ゆきゆくゝ似ゝりと。西域聞見錄ふ。唐書の曼ミ斯ハ。今ハ鄂羅斯。曹西亞。莫斯哥。未亞。皆同じ國なりて。古の丁零ありや。知もる人ハ弱ぬ。北濱狄地乃國とは。唐人の說を大方ゝ。あてなり。唐太島は。古の靺鞨の地なりと

巻老に年ふる波爲は猛の流名鞆男と鞆鞆へ貴さ仕しと今の祐。ゆやの浦海して行しとぞ。わゝ

或老先生いとれ法まぶ。ぞのまゝ考る事なり

因よ云。此頼時ら蝦夷へ行しも。実弧ゆゝ。又義経の渡る流ひゝとぞいふ。偽なゝ。義経。秀衡ら許よ居給ひし日。此頼時ら事ゆ及ばゝ。うゝ。泰衡ら裂ひゝ時。忠臣ども防矢して。討死せしゆふ。忠衡ゆゝ流しゝ事ゆ。此事と今蝦夷地事内の人ゆ語るに。逆らすゝ戎事三ツなゝでいふ。其一ツハ。彼ヲキクルミのゆゝ。又一ツハ。蝦夷どもゆ義経の事を語るゆゝれば。かゝらゝ。涙流せばいと。外乃名将達の物語よりゝはさる

弧泊三年ゆゝんよ武尾流人とし蝦夷の所さふ出知遺されるゆゝ

事ゆ。又一ツは。エトロフ島ゆ。エドロフワタラといふ石を。碍の名も是より出るワタラは。岩てゝ。エトロハ。鮫鼻てゝゆ。ワは。緒てゝゆ。此岩の形。剣鼻ゆ似ゝゝれ名なるもと。或人いふ云。又たゞ物乃首てゝ事れゆゝ。異譯いふ人もあり。扨此島の蝦夷どものいひ伝ふるゆゝ。昔此へ奇異なる人ゆゝ来給ひ。鮫を付岩よりうけ給ふ云ゝゝ。此名付ゆゝるもとゝいふ。此二人。一人ハ義経。今一人ハ弁慶なゝんと。人も碍を此事ゆゝゝ。さゆゆゝ。人乃さゝゝゝゝ。ものゝゝゝゝ。此二人ゆ弥ふ義経弁慶ゆゝゝ。エトロフを立ゝ給ひ。是より東ハ蝦夷人島ゆゝゝ。ゆゝ西の方唐太へ渡る

義経は秦衡ぬき凡人ようらんなく人ふかしらず又はるのそと漁会出て実検せし八月のようす奥州より来りし

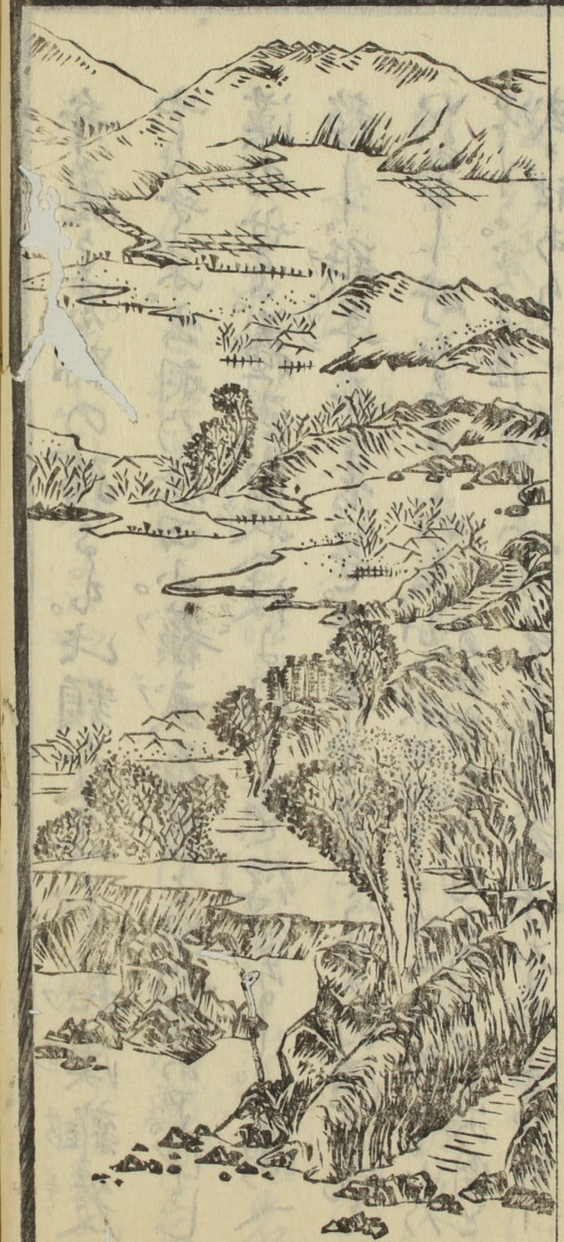
ゆくへしらずなん。此路は舟よりも陸をいそぐなり。此義経の事。唐土の書にあまた載るよし。金史別本圖書集成序寺いつくんのれど。皆偽造なるもとなく。又ある書ふ寛永年間。越前の新鞦韆の地方へ漂流し。彼地なる此主の像を写し来る絵ありしよし。又何等れ像を見まじくとなるかも知るべからず。かの地今かゝる取りなすよ夢物語をくだくくしいふも此主の出へ渡る。今の清朝乃王は。義経の子孫なりといふ事を。年来実説よ度なり。居るん彩の餘まり。琉球乃舞天は。日本天皇の後裔朝云の子なりとふ

根ねくくしけば。豈快事なるべや。又蝦夷乃中より。義経弁慶の事跡ふる所まゝ有るよ。実よ渡る語ひ〳〵やうに。論ぜる人あれど。是又考へのたらぬし。古もいに二君の武勇と。蝦夷ども同伴へ浦山〳〵。己ら名ふ付〳〵が。其古死〳〵後。生論を後人の判官屋敷。弁慶水なゞ〳〵味べるふるべし。武蔵乃國里田川の名ある成平と。相模人の雪路。在中将と取違へく。物知り人乃歌よも詠ぜんいと。ものすゝ。今ゝ古味ふ。信濃の國へ行通ふ人。ある山家ものくいに子達の名。何ものすゝ向ひ〳〵ふ。兄ハ

十五。身は十三なれど。いまだ名は付給ぶべきいつ。
けらば。名付親ふかんと。兄と相物。身を義強と名
乗らせらを。親は怪び。今壽が腹よ。主人かはてい。
やがて産をなすべ。なのみ乗らもの。約束。其
後行くつ人。餘りも久しう出なりゆしうち。先うに
付給ふ。名は法然上人といふ。法然上人
生長の後。暴者の名をとりなべ。後の人は坂は彼の
上人乃赤熱と組伏せ給ふ。所あれば。上人岩
となんやと。語り給ふ。是は子供乃戯も云
なれども。いと山の奥よりかる事もなる物ぞ。姫夷よ

成人云出羽越後の地は臭草水の多き國なり。こゝをくさうづの水とぶ乃こゝ池ゆるるうるそ。とぶ蘇武よ附會せ給ふ

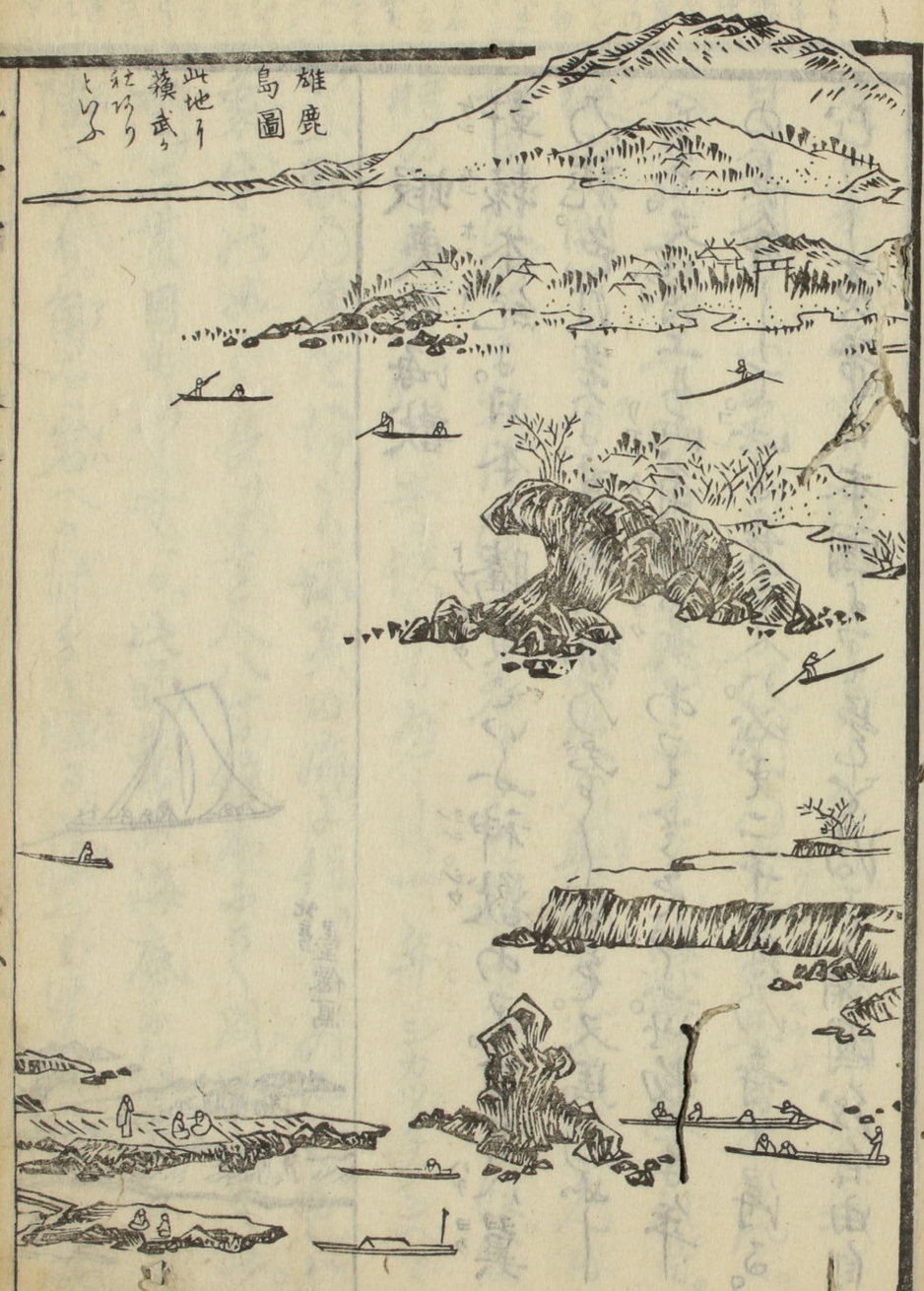
弁慶ら寄跡の強るも。此類なるべし。和漢雜後
やうぶふ。出羽乃秋田ふ蘇武屋敷といふ所あり。なほし
漢の世よ。蘇武匈奴へ使よ行しを。俘とりし。北海へ
移し。羝羊を養いて。此羊が子をうまば。返さんと
いふ。所なりといふ。けい秋田城下より一日路をゆく乃
又。牡鹿郡乃内よあり。此金の国と
武ら社あり
名高き人乃富強ら踊ふる屋し。蘇武ら北海上に
移されしといふ。秋田は山丹唐太をもくもはらん。
丁零ムスコヒヤの先祖蘇武が牛羊を盗ひしを



いかゝは。羅武山丹色ゆえ。一時の作事云なるべきを。今正きべき根ふ。其丁零ゲ盗ゝせ所と。秋田名所の事とし。てハ千里の謬りまて。露だにもまて叶ぬ。近来小色のまをあり類ひ大ぶれと大方おし。ゆてなり。知る人はいまゝ人ハ

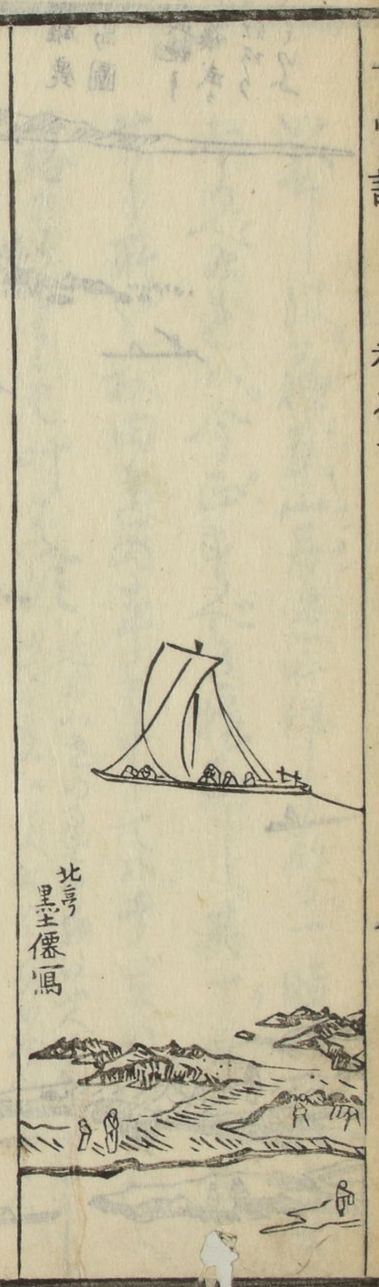
雄鹿島圖

此地ハ羅武の社ありとか



蝦夷の海獸

軒轅本紀ニ。日本ハ騰黃ト云フ神獸アリ。一名ハ翼龍。色ハ黃ニ。其形ハ狐ノ如シ。又馬ノ如シ。又背上ニ兩角龍翼アリ。此物千年ニ一度。又背上ニ兩角龍翼アリ。此物千年の長命ニテ。之ニ乘ル人ハ。必ず二千歲ノ壽ヲ得る。むかし黃帝ハ本國ニ居ル。諸國我自由自



蝦夷ノ海獸　海獸ノ皮。海獸トハ。ホッキ。ホッキハ。獸吉也。黑水ニカヨフ也。金史ハ。渤海ノ別種ニシテ。黑水ニカヨフ也。

由ニ遊ビ。あるいハ。強ク。しいて。ある。その今我が日本國中ニ。ある。ごとき。例ノ方士の妄言なるなんと。人も我も。ふるなり。翼龍とハ。海獸なれども。縱中國ニハ居ずとも。蝦夷ノ奥海なぞハ。住まんも知まじ。ある物。後得て。君ニ親ましまさば。當時の功名。後代ノ奇談なる。一年シカツイタシベと云ふ獸ノ角を。ある。蝦夷の海ニ住むものハ。色ハ象牙ノ如く。長サ三尺八寸餘。本末ハ。周圍七寸餘。重サ二貫目。ある。此物常ハ海底ニ住。ふ。陸ヘ上り。角を岩ヘ。かけて。睡る。寢つゞけ。一日ニ二

日も醒るゝ事なふく。其寐る所を人ふまゝせば。彼の羚羊角を炙く。痕の紫むゞ黑きなゝ。ぞいるよ同じ。

蛾夷人毒矢ゆて射もぐ。通ゞがゝきゝわぎの皮乃厚堅ふわ。年来知る者なくてすぎゝに。近比長崎湖見録ふ載せゝる。和蘭の海物乃圖をみまゝば。落斯馬ふ蠻蛮の遠ひなく。タシベラシメ。名をよく似ゝり。蛾夷人血痣よりゝといふよゝと。ゆまゝ。蘭人ふ見せ注ば。功能ハ知らゞ。落斯馬ふ相違ふゝとハ。見ゆらるハ。

二三十年前。蛾夷海よ恐ろゝき物出ゝり。長サ三丈ばかり。足ふ刺ハ爪ゆまゝく。歯牙ハ鋸乃ごとく。鱗甲ハ鮫よ似ゝく。毒矢毛通らゞ。周身ハ鱷乃めゝ。いうなる大魚を見ふ逢ゝハ。一口ふ殺さゝ。又陸へゝり獣を法へ取喰ふ。只足乃ゝやうゝぬ拙なれば。此を取らんゝ。蛾夷どゝも初のゆゞは。多く嚙ゝ。ふ後ふいゝぐゝて又ゝ射らん。腹下ふ柔らゝる所あるを知ゝて。其を毒矢ゝて射ゝく。三丈ゝず。殺せゝり。かゝふ猛勢ゆゝ。敵ゝ。べきゝのあるゝまゝ。きふ。何ゝらゝふ小獣。ゝゞ口中へ入ゝて。五臓を嚙ゝく。殺ゝ。ふ。虎乃口中へ入ゝ種類の多ゝぬゝのふゝ。猫の者ゝ。三丈ゝ。せゝ。後ハ。まゝ見畜らゞゝ。名を法ゝふ。やらん。語る人を笑ゝ人を。伝へゝ。せゝふ。此を聞見孫よ

出せる。刺加而大小霧相遠なり。和蘭陀ゆてもっぱら怪しがる海獣今姫夷乃海小住むを打り人ハ前の臍黄もなる

（傳漳の産物と称鮮乃産物と似らるる多し前挙ゆさまし然らば又姫夷と和蘭陀也似られるまや）

ゆゞきゆもあゝゞ。菊魚一名丈魚を和蘭人の書よ載せる

と同しき松なるゞ。姫夷の海よあるより。是は人なく知まゝ。又和蘭陀魚乃狐ハ。怪しき事をなせゞるゆ。

姫夷乃シヤコタン（コタンは村なり。シヤは生名なり）乃黒狐を。人波蠱ゆゆゆ

なるゞ。姫夷よ中〳〵だまさるゝゆ。雉の形して味

出ー。ちゆて射殺ゆ。色の黒きゆ見事なる物

なり。此黒狐ハ松前よてを殺しー。専念寺といふ寺よも葬ーるもあり。なのもを見るゝ

通事して和蘭人よ問ゆまれバ。姫夷のゆゆ形恐ろしき

事なり。此物毒ゆ乃人を斃きよせんゆゆゆ。人の臭気

まるゝと。実乃人なるゝと思ひ。近よれハ忽ち噛ゆ。

ゆのまゞ延と地よ吐き毒き。人ゆゆも獣ゆ。すべら

せゆゆ。おろぶ所を生ゆ食ゆ。水中よてハ眼睛ゆ。ぶけも

ゞゆも。水を出ると大よ赫奕ゆ。只ゆ手ハ物をゆゆ。

又口中ハ舌なきゆゆ。此事ハ姫夷人ゆも

ゆ世毒度。まゆ姫夷よてゆの名も有べ。れば。ゆゆ毒

ゆゆ。昔年姫夷乃ウラカワゆゆ。ゆる一角獣ハ。

松前の北川某東都へ持来りし時。ゆゆゆゆゆ人も

あり。是もタシベ乃類ゆ。又古物新志よ細論しゆる。クルウン

シヤは
猪とい
ふんらあ
きくろ

ラントノウニカフルの類。いまゞ洋からゞ。又テクンベコルベ。首ハ
蟹よて。尾ハ海蝦なり。首ハ真珠あるゆゑよ。移前人シャリ
蟹といふ。是も和蘭人の持来るヲグリカンキリなるべし。
詩経の魚服を。トヾノヤナグイと漢まゝ。ハポトドハ。むろし
すり人のよく知まる物とゆゑ。今唐太の洋中トドモジリと
いふ所ふて捕る海鹿なり。松のれ別よ論あり。言ちにれば
いちじ。我こひい海鹿の麻なるもさあ麻てゆゑありすぐら世をやゑ
さん。也海鹿ゆえぞゴコサ。ちく世同じ〳〵ちと多ゆとぐ〳〵。トドの
麻なすが鮮と世ばいりん。とく〳〵海
獸ハ膃肭あるものゆゑ又ゑなり

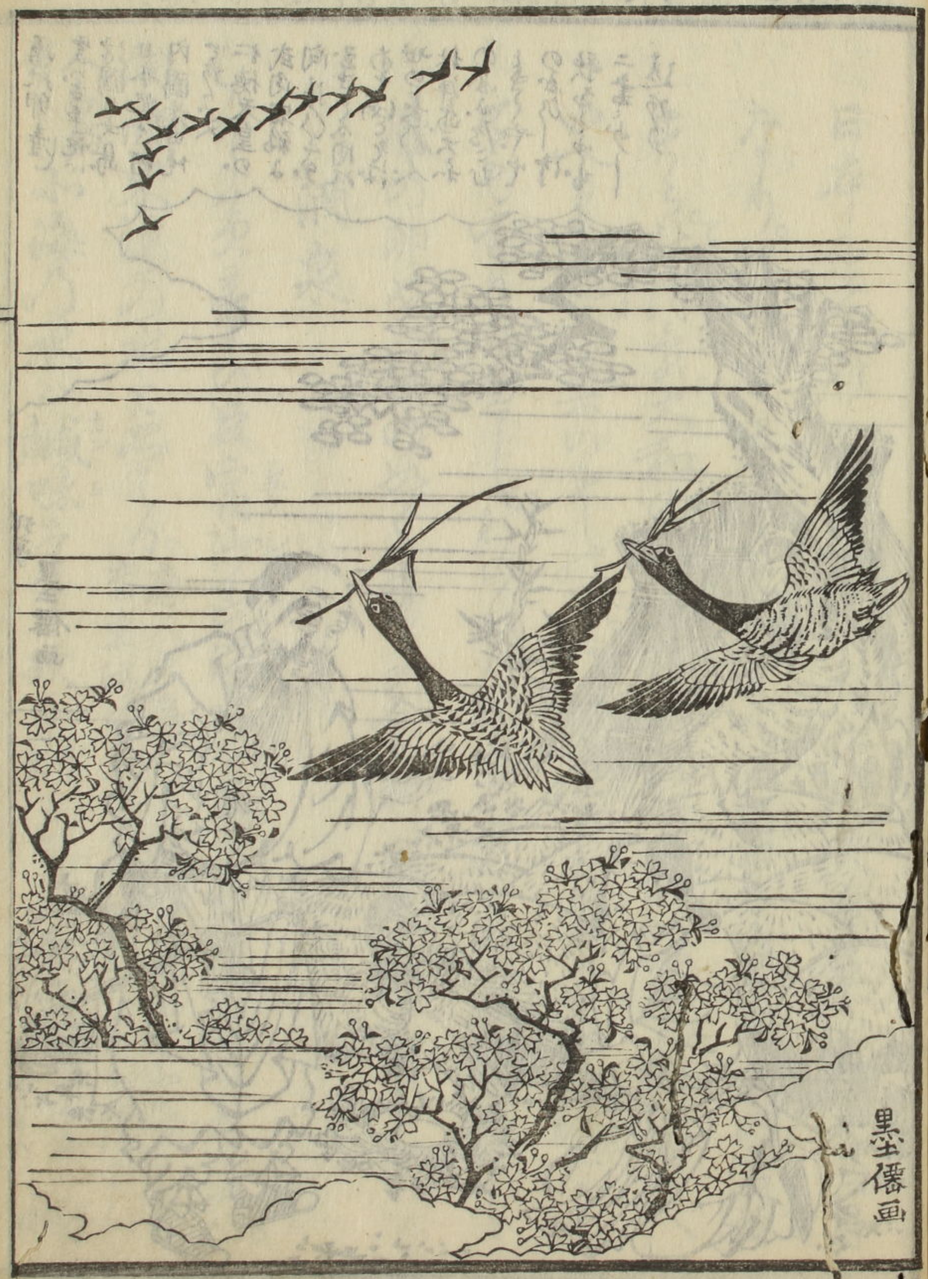
鴈乃故郷

我が日本ふく。ゑ方の物を手取ゝ生ふく食ふ。

鴈ゝ子なるべし。天竺乃物も和蘭陀の物も。
ゝ子れば。何ふても乾くゝ塩ふく生なるハ一つもふ。
燕も常世の國へ往来まるよ。いゝど。是ハ実ハ
冬の月ハ地中へ蟄まるとゆゑ。苦年日光山法印事の時
加茂の大湖ハ山内ゝ燕をゆり出せ。
いゝゝ むゝ。も長く九穀堺よ。兵糧法きゝく。嵐を
ふゝ。遊を塩出して飢を凌ぎし事あり。晉の郗鑒雁い
ゆ方乃北極出地五十度すり先き。大海の厚く氷る程の
寒國なゝでハ卵をゝみ。雛を育る事なゝ。唐人北狄
乃防きふ塞外雁門関なとゝ出く。鴈の雛伐悔るゝを
見ゝく。詩を作り注ゝ。ゆゑ。蝦夷地もウルツ論

シモジリ盆うりハ。例年五月の初乃比よりなれば。雁
でも南よりハ。渡り。夏中ハ盆うれ。沼水澤を居く。雛を
育ひ。子取りふせうるなどかまでも。雛の往ハいつまで。
八月中比迄人間とする比。始めて取るよ。うろう
ハ。遠ふ海を渡り来て。日本乃人よりそれ数ハ
たくさん。渡るべらなる。此道理を知らぐ。弘安四年ハ。
蒙古とハ唐の唐の大比國より。多分列分軍と仕うけ。
襲ふ来るもの。十万乃軍兵とかく日本人ハ殺
されぬ。生く残る者僅三人なりぐ。雁ハ
北ゟ来る夷狄なりぐ

唐比ハ唐土を
ハ。唐土を
衛ひとり
ゟ。唐土ハ
ゟ。唐土ハ
ゟ。唐土ハ
世話ゟ。
東奥海を
よりハ蘆を
ゟ。
唐風爐を
わのすとハ
話ハ。
唐土ハ書に
載せぬゟ
ゟ。



唐礼卵産
変い古事記ハ
淡國日女島
日本紀ハ河
内國茨田堤
とゐり。又
仁徳天皇の
武内宿禰ヨ
問給ひしに
おきなる問れ
ぬ。ぬこそは
世の長乃人
秋津島大和
の国よ産こむ
ときくや。中
の国ひ。伴
秋幸ゆも
二書ハ。ハ
遠ゐり

日本ハ。ウ雁の子生るゝ。仁徳天皇五十年春三月
なり。珍しき事とゐて。三百歳の老人武内宿禰
申ス。秋津島大和の國ハ。鷹ハ。我ハ。ゆ。
いへり。燕乃巣の中ハ見ハ得ずとも事うけ。なく
て。有りぬ。ぬし。ハ。のれハ極ハ乃國ゝを版図ハ。
雁の卵を。雞のゆく常の食料ハ。ゆ。

酒泉

むかし。秦の臣宿沙氏。海水を煮て塩よせとゐハ。
南海東海の水を。ゐる。唐人北海ハ。唐土ハ。海なり。
人。ハ。ハ。皆東海の事なり。唐土の書を。漢ハ。
ゐ。ハ。海乃水ハ鹹味なり。故ハ。海潮ハ。ハ。鹹
漢水なり

味なき物ハ。大陽天日の素を受けぬゆへなり。唐土ハ
塩井塩池のある所。大ゆへ海辺の所なり。是ハ海辺ゆ
して。塩ハ不自由するゆへ。ふねを用ふるゆ。必ず
塩の出る所と定まるなり。見付ゆ上ハ。製作ゆへ。ゆを用
ふるなり。日本ゆへも甲斐陸奥出羽などにハ。皆塩池
ある。奥羽の地ハ塩ハ不自由ゆる事ハ。海辺ハ塩池乃
如方多ゆるゆハ。ゆへ也。甲州ハ素
形ハ塩池なり。府中より僅七里ゆ遠ゆ。一郷ハ素良四ゆ
といふ。奥州ハ。尊津伊勢郡月輪大塩里といふ所の岩乃より塩漫滴ゆ
なり。西行の歌に
いつも待つ月乃ゆ影ハ杉前ゆへ。芳ゆより塩焼ゆぬハ其本ハ煮る
事と知ぬ。ゆへ也。煮海ハいづゆも東より伝ゆる也。松前乃地京都ゆ
遠ゆ

海せ給ふ物ゆなりといふハ。誤りゆる。かゆる事ハ。神乃
あゆ。ふと人ゆ神ゆ願ひ付ゆ。ふたゆ
御名を敬ゆ。ゆへ也。今ハ神ゆ。きゆ
不自由ゆる。ゆへ。ゆ
塩ゆ。ゆへ。ゆ
勅諚ゆ。御祭ゆ。厳ゆ。ゆへ。
氷海近き所といへども。壹浅の海ゆ。塩のどゆ
所ゆる物ゆ。是ハ東方ゆ。ゆ
ゆへ。ゆ
塩奥ゆ。疱瘡ゆ。ゆへ。塩ゆ。煮ゆ。ゆへ。難胆や
塩味を食ゆ。ゆ。ゆ。疱瘡乃ゆ
流行ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。塩

奥おの地ハ海をきゆ
ゆへハ塩ゆ
自由ゆ

塩の神ハ海ゆ。ゆ
ハ塩ゆ
灶ハ火ゆ
ゆ

池のかたよりのみなくば酒泉を本北方ふかるる。虜酒（エビスノサケ）
千鍾不醉人（サケバキ）といひく。韃靼（メングン）の酒は味甘てうす。姫
夷人日本より来朝をとゝひ。一夜作るの濁酒を釀（カモ）す
るも。其薫（コロ）きるすけ虜酒（シュ）と同じきなりされど又姫夷な
酒泉の出る地あり。鳴名をチリホイ（イ）といふ。石間より流れ出る泉
あり。味い上酒のごとく。香は梨子（ナシ）のごとし。いうぐ
る飲（イン）すれども。酔（ヨヒ）さるすくなし。是をカモイワツカと
いふとぞ。神酒（ミシュ）といふ意なり。唐土の酒泉も。西北の邊
地より出るくすけ酒泉も。水丈姫夷ふあり。人製（ヒト）の
酒味うまきこと地あり。又うるゝ奇（クシ）き事もあるなり。

醴泉の涌出。待統天皇七年江州益須郡に湧出る。三年濃州の湧出る。文徳の仁寿四年に石州の湧出る。國史にあり。

塩井あり。酒泉なり。天道の人を恵み給ふ所なる
べし。但人の孝ふかるもとく。家の井（ヒイ）水のかはち酒と成る。
氷上郡鯉（コヒ）魚の躍（ヲドリ）出るは。常に孝事よかるべし。天乃感（カン）
恵（オウ）よかる事なり。古より天の孝ふを感（カン）恵（オウ）し給ふは。
常ならずぞよ。塩池と酒泉と。いづれも孝ふ。
女王（ヒメオホキミ）よ強ぜき給ふ。額田（ヌカダノ）
和歌の感恵
時に成人（アル）に感恵（カン オウ）よはきて。をとゝき事なりひ出
たりと語る。むかし某（ソレガシ）ワカ歌（マウシ）せんとて。
猶とありきて。奈良（ナラ）の初瀬（ハツセ）越（ゴエ）とんぼしてゆく。木津

川（一名いろみ川）を越る比。日もうれ。雨もふり来りて。宿（ヤト）す人あり。（猶り旅人いたうこ宿りきだ）悲しきさいそ毎ふくぜんこあふく。」都をばらふいづみ川日もうれぬなれ一夜の宿と

かなる山。うく御ぢ法く。いづくとなくもなく来どり行ふ。京ふて来る人ふ（ニキ）行き合て。見いづくへ行く。日暮るく山だち多き所まふ入ていふ。志ぐ〳〵のよ〳〵いふ

しらば。はらば我が知る事ふ任せ。なて行く。酒肴（サカナ）設（モウ）けく。いみ〳〵しうもてなき。菜（サイ）なりふ根。これい和歌乃徳なり。世ても未れまでも。け道いまぐ地ふ墜（ヲチ）ぎる。感（カン）

意ふ堪りたる。今より日毎ふ歌よみ。〳〵ふよ御国〳〵

急いんと。其次の日い三輪ふやどるふ。あ所ろ〳〵ふ熟成

よみ侍（ヲ）く。」三輪の山宿と云ふ。ふ〳〵ふ我ふよ。さても

いづくぞ杉ぞる門。三輪よ立ぞ。里乃入口ふ。これ旅

人法宿やさんと呼ぶ。一人ぞ出へ。ぞ〳〵かぞ引入ぬ。

歌乃奇特（キトク）いちぎるきと。喜び入〳〵やどる。見ぞ家の見

ぐるーはらひ物乃きをふさ。夜乃物ふい人の肌（ハダ）ふ。

出さんと云あるく。身の毛立ぞ。ゆてぞ抱ぞ

ぞ〳〵孫〳〵ぞ。ぞ〳〵て。表ふ大蓋（コウ）さふ。溢（ヒル）ぞ。若乃

馬子ぞ。宿まる人ふ酒のあとい〳〵なり。来合（キブン）ぞ。ひと

陳（チン）ぞれい。杯のれい。〳〵ゆ〳〵ぞ。我を見初ぞ。

三和の八といふ市馬方(ウマカク)様でゆいてよやーゝ孫いてゝ孫ば。
るるこハ人こすして明ーやりぬ。扨もけやーとゆゝこのゝら
なるものぞ。強盗追剥(カウトウオヒハギ)乃ぢ。杉の根獨りと杉り刈ゝよ。
ゆひ宿もあるもたりも。扨のふるるまゝにいと恐るゝ。
いも孫ゝもてゐふ。丑の時だるもやーゝ孫ゝうと杉でゆる
所の竹箒(タケスノコ)子ぎゝゝこと多。見ハ杉のれを剥(ハギ)ふ来る
ふるべゝこ。脇指(ワキサシ)なぞ引寄せ。息はめて根子(ネガ)何ゝに。
此象ふ獨りるゝ。ゝきゝ女なるもたるそれよ何やら
ものいふ。女。起(オキ)ふるゝ。ゝこいゝ彩れ学ゆるふゝ。ゝも
前付き。多れ彩ゝも。やゝて起ぢゝ。朝乃物も

食ものゝ立(タチ)出ゝ。見ハきのふ乃歌のるるゝ。
加ふうき目るゝ。今より彩ハふゆうなりふつゝ
まゝきゝのゝゝ杉りひゝよゝ話ふ。実ふうゝゝ
るゝ。初の歌ハ。実(マコト)るゝ出はまゝバよゝき事もゆるゝ次のハ。
俳(イツハ)りるゝなれば杉のゝゝうゝる事るも全てるなり。
一座(イチザ)一宵(ヒトヨ)の話(ハナシ)ゆも。いふはるゝふゝ陽ゝよ物ゝよゝ。
ゝゝハ。辻(ツジ)菓ゝうゝるゝ。又ゝゝ世物なぞ持あるゝ者なるゝゝ

一宵話一之巻終

一宵話草二編

巻不

一宵話第二編

夜ニ長談ス亦閑子其説ヲ免ル

曰ク吾曰ク兄ハ易ニ畫者也ト画者ハ

易ニ説者也ト而稽且吾之如ニ向ハ

賢ヲ其ニ將タ如ニ之何ヲ曰然リ請ヒ先ツ

説ニ十八人ヲ

目録

尾張演主　福佛坊　光馬
龍の雲　海中孔火　異人
稲荷狐　天狗乃論　鍾馗大臣
鯉ハ瀧升り　亀の教　朝鮮易者
千字文　唐土無佛書　天文者
新羅大盗

高洲　千賀庸圭

一宵話第二

墨僊輯梓

尾張演主

五雜俎ニ。本壽人を列載せし。其最第一人なり。日本紀武内三百七歳也。さしも長き唐土にても。此人より上なる人多くなり。さて此を日本紀にて後こそ。東漢の唐土へ渡りたると同やうなり。況書紀にまでやくく彼に渡りしとおもふの人あれと。此ハ宋史に。日本の大臣紀の武内とあるを。継氏の引書るもれは。さハ後ずゝき事や。此ノ武内大臣ハ。紀伊国ニ生れしとい。子孫紀を姓とし。大和の国に大臣

位をかしこうらに内大臣と称せ[illegible]ん。仁德天皇の御未
まで生命し。六代の天皇をつゝくられたり。和壽ハ。
公々補位ゐる。三百十二歳。是曾抄ゐる。三百八拾歳。或ハ
東國ゝりの伝ゐる。甲斐の国の山へ隠さられしゝも。
因幡の国金龜へゝゝれらしゝともいりて。さゞゝゐる
らしぬゝゝなり。むゝゝ人の言ゐ。賢相ゐるゐ比ハ。
神仙ゐるんといひしゝが。比大臣ハ。二ゐ[illegible]ゝ萬ゝして。
いとめでゝし。上代ゐ。上ゐともこゝゝ年めでゝゝゝ。
今のゐゝゝさいゐ。墻ゝ波尊。火ゝ出見尊。
葺不合尊。世三御代。合せて一百七十九萬二千四百

七十餘歳也。甚内。火ゝ出見尊ハ。五百八十歳。其御子葺
不合尊ハ。父の尊ゐ準らゝハ。五百歳所ゐるゐ[illegible]。此西御代
合せて一千一百歳ゐ[illegible]ゐ。墻ゝ波尊御
一代ゐて。御壽一百七十九萬一千歳餘り[illegible]ゐ。父の
尊ハこゝゝ御年壽ゐゐ。御子の御時。俄ゐ御[illegible]命
ゐて。僅ゐ百八拾歳。御父ゐの御年。一百七十九萬一千
八百歳斗の遠ひゐるゐ。者ゝゝゝゝ出るゐり。玄原ハ。
墻ゝ波尊ゝ。大山祇神ゐ[illegible]。御女二人壽りゐひゝゐ。
姉磐長姫ハ。貌醜く。妹木花開耶姫ハ。容美りゝゝバ。
妹を留て。姉を返ゝゝ。姉の姫も。父の神も

恨を謝ひ。時を得たりて。御子孫の御命(イノチ)磐(イハ)石(シヤク)ならん
ごとく常盤(トキハ)なるべかりしを。然るを木花(コノハナ)の
移り落るがごとくなるべしと申されし。此を日本紀には。世(ヨノ)
人短折(ヒトノイノチミヂカキ)縁(コトノモト)也と仰せり。この事まてもうしと紀事なる今人
の短命(タンメイ)なるは。迩(ニ)々藝(ギ)命の御拒ずとより起りしといへども
口をしき事なりし。神代には。拒(イナ)ひするものは短く
侍りて。ものたまへ。伊弉(イザ)那(ナ)岐(キ)命の言(コト)の事とかわ。世は人一日(ヒヤクビ)
歳忌むは。これその縁(コトノモト)也。天稚彦(アメワカヒコ)の事より。返矢(カヘシヤ)を忌むといへども
その縁(コトノモトナリ)也と仰す。此ふしなと云ふるされて。いむべき節は。後の
世まても忌む事なり。遂に破るる代は事多し。人の寿命に

かかり。蛇足なれども。古人美女と忌むは。これその縁(コトノモト)也。
と見るさるべきなり。さるともなく。又代々の天皇にも。此後さごる
のかくしぬるぞ。いかにぞや。今人の指(イマイ)忌をするも。たまさかなる
相(サウ)にて。忌むべきは忌まれ。忌まぬもあるべきにわあらぬと。
ことごしう忌むなる。神代(ヨ)よりの風俗(ナラハシ)にもあらん。いと
浅まし。宅相(サウ)剱相。又相墓の事は甚に大なりとして。子孫の盛衰は此事にあづかる事ありと。古人詳に論ぜて。其書も侍れども。今人をさして浅論せん。おのれある附会。ちかふ忌ふれ。土は肉に忌ふれ。肉はこころに忌ふれ。といひしは。俗のにさがにやあらん
却説(サテ)此(ノ)武内(タケウチ)大臣に次(ツギ)て尾張(ウナ)
連浜(ムラジハマ)主(ヌシ)と称へは。目出(メデ)度(タ)かれ。長寿也。風流(リウ)也。天上に不学(ガク)の
神仙なりしとは。此浜(ハマ)主(ヌシ)をもつて称ふ。此人のことは。書人にも
聞えあり。仁明　承和乙丑十二年。正月。戊申。朔。乙卯ノ日。是日外

後五位下尾張連濱主。於龍尾堂上。舞和風長壽樂。觀者以千數。初謂鮐背之老。不能起居。及于垂袖赴曲。宛如少年。四坐皆曰。近代未有如此者。濱主本是伶人也。時年一百十三。作此舞上表請舞長壽樂。表中載和歌。其詞曰。那々都義乃。美與尓萬和倍留。毛毛和萬利。土遠乃於支奈能。萬飛多天。満津流丁己。

正月三日也

天皇召尾張濱主於清涼殿前。令舞長壽樂。舞畢。濱主即奏和歌曰。於支那度天。和飛夜波遠。良無久左。安支毛散可。由留登支尓。伊天々萬比天年

天皇賞歎。左右垂涙。賜御衣一襲。令罷退。物ずるゝ。魏文侯の

の楽人竇公。百八十餘歳の老書して。漢文帝に附奏して。若返童とも。此老盲人なりしが。齢の事いまゝ。去年四月三日。琉球人当麻の宿にて。琉人ともがのれる船書きてよりとゝひしーゝ。時も時。日もはとゝ。わらひ知て。濱主のうゑ出きし夢くたれ。再三わ〳〵載きみぐし。とゝぐいひける。因て庚寅の和歌を。詠るも澤〳〵ものあ。濱主の歴仕昇平七代天臣。今一百十三年。和風長壽新翻曲。頒向瑤階舞御前

白頭不用懐愁苦。德沢今逢春雨普。艸亦生榮木亦榮。老臣亦

向階前舞

此演舞ハ。尾張の國の人なるゝ。先雲記一巻しつるとて。
明治三年。今雲書記南野村の福井某ゝ家ゝ。古系譜を
作へたる。其初祖ハ。後丸信濃ゝ演ゝる。其次ハ演史とゝ云ふ
なり。此系いとゝ古きゝ一なれ。これやいとゝ尊ぶべし
尾張連のあたハ五畿内ともかゝとこゝ
あるて此尾張氏のゝ孫ハなり

或人云和風楽。本名ハ春雲寿楽。本名ハ春雲寿楽也。此二楽の
舞を演ずゝ作りしゝ又河南浦も。養和十四年ハ演ずゝ作りゝ赤白蓮
花楽ハ。天平二年無福寺ゝ花會ハ。尾張秋吉作る。此秋吉ハ演ずゝ四
候ともつゝ。孤しも保ゝ千。雲向ひ西ゝ。又云養和十四年ハ。演ずゝ百十五年。

月光亭
墨僊寫
光亭

文化乙丑年。浄チウゲン勘助の母は百歳の賀ふ寅八百四歳。八十年
前嫁せしが。子四ツかくせしと。或人いひしもとより。母人〻國瑞〻といふ。
問勘助以其所為養則曰。抱撃之人。家無餘糧但菽水畧
足。未嘗乞貸於人。嗚乎。今世大小諸侯。誰不俯首仰給
於商賈而勘助何以如此。家〻而勘助。人〻而此母可以
無憾焉。謂之國瑞不亦可乎。

福佛坊の事

巳保元甲申年。奥列島領の山中に。福仏坊と云仙人住居。
樵者ともはく〻見あるく。笠へ〻られぐ。そ。仙人を捕ふ為さら
命下る。やうて捕へてその身ぬるる。本国八伊豫の者。わうら
しの悪事して世を忍ぶて。東國へ下る。此山中に入り。
木の実をとりしが。いつとなく年をとりもあせるる。むりのすぎ
年を問へども。皆忘れ。ひとつも覚へ事なし。但来る人へ
下る。時其途中尾張の熱田を通ふ。宮ちの達磨
の供養をなすとて。余語の男を集聚。こうしてこれ一ツ
和ぼくさる年なる。仙人なるれば。いかハう分抱なる方法。九ふ
深山のわく〻入る。毒ひ出び方なるぬ。此仙人幾許の年齢やら
わらん。熱田の達を祭ふ。その時の人もいひ。
又後ふ熱田を尋ぬれど。此達人今八百といひし人もなるる。
おのれ幼とおもひくらめて。府下る従兄ちの達を尋ぬ。

家にて奏聞の神宮寺の物也。此を織田信雄至父信長の
ものゝ。清須城に建置れし。国家にて。禅寺なり
なるべし。あつまのとなりて。此寺の魚鐘なる物。此寺院の名
なれども。鐘の銘に。勢田宮　神宮寺　延徳元年十月十三
日。檀那浅井備中道慶菴主。なるべし。見世出バ。鐘もなきことの
延徳元年より。保元と百四十年。保元と百四十年。
れば。大抵百六七十年斗の人なり。さあらざる事なれども。
今の人のんなり。仙人とはいとうんも理なり。面白き事。
四国の山中に平維盛仙人住る由。聞伝へられぞ。
保元と百四十年。

家にて。ざらしなり。

神君分保嚴様を以時彼四つの人にて事もなりき

世維盛仙人のなれば。此の事なれども。

或人云。信雄なれば。孫にいき人なり。尾張合国に。小保勢
国。保家にも領ぜ。大諸侯にて。種一の強
事なれども。人の家を強借りし。父の基抜ける掛て。切徒
乱なるハ。いうるんなれども。小田原陣の時。軍興なる
に。隙嚮被つて。絶て。伝ての秋田へ流されしハ。
家の理なり。ほそ流されて。清須一族を。強盗
なる事。別の法なり。人族なるとやうて大なる

世信雄主の罪なるなり。元亦豊臣公おのゝ威力にて。徳川家へ世券を。あくんとて。移封と命せられし。世券をうけて。臣下も同ぶくと。主婦なれ。辞しけ。さきにしを。公怒りて。秋田へ流されしといふ。さもなんなり

義三ッ建て。其年の内ゐ。兵糧米を皆〳〵積ミ重ねて。初と
る〳〵実ヶ原の軍記りしに。佐竹雄系ひ〳〵て。ハ十分一ゐも
為〳〵ゐ為上るれ〳〵も。陸奥の城ゐ兵糧米世方石除て。皆
られしう。ミ建られ〳〵義ハ。今有ひやる三ッ義ミ。
比時の切ゐ。安義倫ほ二ヶ所拾領ミ〳〵れ〳〵も。
丁ぢ〳〵おわ四れ

老馬

九郎判官義経。ひゐ多敵えやん〳〵て。路の案内ぞ〳〵
ゐ。武蔵国ひ住人別府小太郎清重。生年十八。案ずゐ
中ゐ〳〵ハ。父義重ゐ〳〵ひ〳〵ハ。ひ敵のり敵ゐ。
ゐ〳〵と歳ゐ。おゐ〳〵れゐ。深山ゐ迷ひ多〳〵んずる時。老馬ゐ
縄むすんでうちうけ。えゐ。おわ四ゐ時ハ。必ゐ〳〵おゐ〳〵ゐ。を
〳〵ひとやゐ。判官義。やゐ〳〵ひ〳〵ゐも十ゐ多ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵
堅ゐ。をゐづ為ゐ。老〳〵ゐ〳〵ゐ多ゐ〳〵ハ。ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵ゐ
ゐ。白ひ〳〵げゐ。ゐ老ゐ。ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵ゐ。ゐ〳〵ゐ。深山
入ゐひ〳〵。此ハ管仲ゐ。むゐ〳〵と行ゐひ〳〵れゐ。ゐ〳〵ゐ
ゐ〳〵ゐ。此時判官義の兄蒲冠者義の序目と
ゐ〳〵ゐ馬ハ。老ゐの最上ゐ〳〵ゐ。蒲義ゐ。ゐ〳〵ゐ。蒲義ゐ。ゐ〳〵ゐ。深
家の方人せ〳〵ゐ忠賞ゐ。此馬を殺ゐ〳〵ゐ。菓池ゐ家ゐ。
代の至ゐ。ゐ〳〵ゐ。菓池大夫と婚姻ゐ。ゐ〳〵ゐ時。累代の宝

送りしるこの売るもはや寛の一りんなり。大友義鎮氏
るふ筑紫の坂寺村の地を賜て。領料とたまり。そ後此村
小早川秀包(ヒデカネ)の領となりしが。義鎮と左ようなる人。なるゆえ
て。田地を沖へうひ乗き。文禄年中ためで殺てだのりし。
壽永ゆりこのぞくえバ。三百年ばかりもゆんとうられ。おか
の年なんのげ法よき人。小鍋(ヒデ)とよぎり。梅もくあるごとき
売るるなり。売るるを先なんを進ぜなバ。唐天竺(カラ)ハおろかな
事。わんぐ難勢(ダメ)の地方へも渡る。義経の出る孫の事
尋ん道なおしも遠ハしと表(ヨロマ)ぶる。へくをうーぐ。此を
ん降遠ちう。売るハ情強ハ知るとも。海路の案内いぐ

せん。そを屋(ガ)をこれ敷ハ敷ハ敷てといひし。ちか須ハる法養るを
船ゆて渡されるをバ。大海の波沿るゆゆれ。足紙ハるやう。目
まひをハるやう。船中よりとト〜と泥(コン)れし。命うう〜。ハうりの
小島へのぼ〜れしう。(ヨカ島と)(いつも)(哥や)そふハきのふ。松前養渡海の節
たぐ二疋のるを船へのするるすう。殺るるみるれ〜ちう。
先ッ船へ乗(ミチ)ハ乗を出うけ。ハるのよへ古儀を〜とるべ。船も
又ち儀を出く。うくせぎれハ。蹄(ヒヅメ)を損ずるようちう。お船へ
のやて板。上うう大縄を三筋うけ。るの腹の下へ〜〜。
るをちう〜つりよげ。蹄の古儀とハるる〜祝ゆするちう。
かくせぎれハ。前のてくゆ〜れて。馬たへうぬるようとう。

此等の事皆能き知れる人の尋ぬべき事なり。あんぐ船中の牛馬をのせ来るハ大きなる船にて。皆多くの船のまるゝ。いろ〳〵の物を船にのせたりと見ゆ。

龍の雲

寛政八年の事なりとよ。常陸の国鹿島の浦へ鰐なりとて。海面を黒雲一ヶ雲三ヶ村の百姓。天のなるゝと云ひて。見おろしいる。男女とあふぐハ。十町ばかりを平まて。船四艘ばかりなりの。我先にとこぎ出す。打寄海面を黒雲一むら出るへしとハ。老人なの雲ハ。ゆぶんがなるゝぬぞ。風なりがみられぬぞ。出ばゝ拾ふ人合ふと。制なれども。耳をかも使ハれ。船をこの。のる時ハ。船の間ハ。なるものゝ。

やまと。仮抱て来まて。皆より船へ。おのゝ。やゝて一里も出し時。なりやゝ。ふと吹きおちて。彼黒雲きびこりなり。海一面ちゝ黒みなる。皆の者どもこれをきて。ハア〳〵といへども。すゝき拾ふ。ちぶ〳〵して。風なぎこゝ。ゆ。船へ。龍の雲。中へ。皆よりしやん。一艘もなくなれ。ば。救給てもおとゝれ。逃ゝてなり。きや〳〵の者五十ばかり平。一時なさつなりなり。此時。江戸の中。弱平のこりしこと。田地の耕作も。出来。海面ハ。皆黒なるも。押入る。又江戸の中。新と云ふ。所の妻ハ。なこと所の者なて。なこと。信平四人一度なるせ。

を。なげくらを載せ。又をち浪水戸の咸章をへるハ。
雲をはらしーそのどもれ名も傳ふ為にて。
年月数をつゞも。年一おだ傳ゝびとさゝやとして。
おのれそる紀ー雲ぬ。或時はるをいひおてうる時ハ。
急よくゝ数のをきう。烟をたをれバ。雲を捧ふ
をのくゝ一夜れバ一人の驚師。剃主の高頂ををで臣。
面ふりめきものをいうぶせんといふ。それにて生ろ拓をの
生きき梟ををやをきくとを鶴ふ。此ハ載ふ。洋中の
船の拓をゆふ。をるのををを多くゝ物ふ系ふ有ふ。元急成
とき。烟をたをん拓をうとを。一年江戸の栖をや某ふ

舟。こる雑ふ急ー時。船中ふあるとなる又拓をぬを。船の屋
さきへをるくをー上ヶ為ふとを。これもふーをふ。をるの拓れ
筆ハ書ふも出ふれバ。国をを宵度をつや
国ニを。をるのくをふ。風を雲霧の変ふ多をつも。此海と
の事ふ似ふーをのをふ。苔筆をる元崇ヶ軍。日向の
雲霧高山穂峯ふ光ふ。彼逆鋒の毒ふ多ふーバ。俄ふ
山陽ふ雲起ふ。雷前先ふ走ふ。おをふーとふつも
おふふ。著木ふ年頭七時の和宜こいつの写ふ用をーをん。油ふ
栗粒の類をこれふ。疾風急雨ふ白ひ。投ふけく
せーふは。やゞて風ふ静ふ。雲晴ふ。これハ彼天

穢の害をさけられたる。白石先生有記 いづれの山も。高山ハみな
事有るにあらんが。得すべし。此等にても。美濃の国
飛騨両国の山ハ。国中第一の高山なり。此山の絶頂に。飛
中の村々より。高きを引て見るときハ。雲白くして必ず風雨
起る。是を土人の説に。大勢が登り二便して。御山を
穢すゆゑ。神いかりたまひて。洗ひ浄めたまふ雨なり
といふ。是ハ神の清浄を尊とべバ。穢ハしとおぼしたまふ。
然るにいかがあらし。家を造りて。家の庭なとごせ
ぬるを嫌ふる也。殊に人ならバ。まして深山中に居て。
二便せぬものハある。おもふに深山窮谷中に。積雪霜
凝結る雲霧湿気。数万人の声にてゆるぎ動かされて。俄に
雨ふる事のあらんかと。或人いへり。此も理ある

海中の火

或年の六月廿九日。紀州の浦より帰る船。海中にて火の玉の
むらがるに行逢たり。其火の中に。鬼が人が。髪ふりみだしたると
いふ。此火の中にあらはれし物を。平家の亡魂なんど語られ
ども。何のゆかりもなき所へ。来るべき由なし。おそらく
紀州のしらぬ火ハ。此火なるものならん。此しらぬ火を。景行
紀に多く月の下に出ると見えれど。月の晦とおもへる。今も
第六月の末とかや。八月三日にあるなり。其中。七月廿九日。八月

海氏小南信濃の豊島むらびとなり

鈴日。此海日を極暑中とす。これ海中の陰氣。夜中の炎天のごとし。亦晦日の暗夜のごとき事。てもうしとも同じ事なり。海みなもを去ハ深みまるが。二日の陽氣を焦げて。鹹水とハなるなり。されバ鹹水まて火を消さんとて。うちそそげバ。却て火勢をまんまなり。甘酸苦辛の四味ハ。草木を生ずれど。鹹味をそ海みなりなるまて生ずる。海水以杖撃之火星勃然とりと。是化篇のセ。信火潛入焚と。文選の海賦にもいひ。元微之ハ。海夜火燐々と作るなど皆海水の火のめく光なり。知多ハ船の。火中ハ抱のごとしといハ。おのが氣のうたなるなり。畜化ぞとおもハるゝ。

石首魚然ハ光るものゝ

異魔を信ずるかけバ。火光あるものなり。

目とるあれハ。平家の亡魂とも。源氏の幽靈とも。さゝゝあるゝなり。此知多の浦の漁火ハ。漁人の篝火をたき。乳母なるし燈り来ると。るを見聞きたるなり。とふ。さもなくして。怪火て焼きまれハ。然自消る者なり。

一説ハ。そゝゝぬ火ハ。海月魚の光るなりとふ。蒙人の説なり。海中の大ハ皆魚れの光りとハ。

又秋の皆ハ出るふられ。前説をうとし。

又出る所ハ大抵定りの所なるをされハ。後説をうとし。此ハ少しそなるなれバ。のちの云へし。山中の火氣のごつ。

元亦方星氣のなるなり。唐土姚江の火も戰爭すと三四月なりとふ。信ハ云ふ火のゝ。ハ。蟾蜍の化し。蛇ふるて。比叡火。是もなるべくれとこゝめなり。子子の母ハ。

生ずて敵となるも同じ。又蟲。山魯。雑。夜中の。

光べハ。皆光る。蟲化のなり井ゝ。ふれ。遠ハ火ある。山魯ハ。尾ハ星多なり。こふのゝまもなり。

此碧雞ハ後世の書にて見れば雉と八ツ尺ばかりなるもおりみきゝ
ゆとなりて明許維楨が賦に尾開宮扇口弄生簧と作りて碑は離りしかども此もの
出世するよりも見えず碧雞之夷洵瑞徵也
ともいひぬべくあつくとめこと
で山童が飼追随々野老相傳得覩稀と
も作り乾隆元年おのゝしは鈴聲琅々とも
きゝぬ怪しきものゝ
やうに一時は並ぶべしとも
記しぬ色
青き鶸新色
恰に勝鶯
と對句なるべし

十二ヒロ。ばかりなるらし。山中の人いへり。ゑのるゝ
ものハ。雉の類なり。塒のうちに夫のるかゝるまでもなくる。
蜀山の宝雞の祠の神ハ。山より山へ渡る時。毛尖きく
はぐき。ゑくと聲するらしゝ。雉。山鳥のたるゝ類なり。
遠ゞて此山海の火ハ。皆信火なり。信火なるゆゑ。
二種なり但唐土の火神ハ。豆腐なるゆゑ。いとおそろしきもの
なりと。まるいひ傳へ。此神もさ武文だうもなんう。
山を和ら的。雲なのる。毛雲朱らるゝも赤く。性来のゝ
ゝ。必ずぐるふ。毛毎に血の色のあし。毎年出るゝ。又稽めるゝ。
天的に実宮ふ出し時ハ。唐土ゝ。ソウヤのバツカクベツ

傍へ走る。暫時為る様にて。唐土の方へ隠れ。蝦夷
ゞも此神を仰ぎ見れば。或ハ家孫し。或ハ熱病ならふ
らゝ。此ハ河の神なんゝ。火球重龍ちゝとやいなんう。
揚州石覇の民。暁殺ちんとしるゝ。内なて火光急嘆く
として。獲ずんとす。ワツト呼びて。倒るゝて驚てハ。
ごゝゝして。地ゝ陥ちてゝれハ。金龍ゝて。首は平釜の
めし。おそゝゝちぐゝ堅めゝ。ゝ陥ふ地ゝてゝれ。
赤金なり。とれゝり其ゝ高ゝ富りとなん。地夷地ハ金山
為ゝとゝへバ。此尾ちの神ハ。ちゝ山ゝゝ生せふ神も
なんゝといふ。人ゝ。ゝゝ此神ゝふゝハ。大福ち者ゝ

なるべきことをのみをもて来ぶ。小人を利を喻るところいふ
所なれ

異人（蒙古十四年四月七日のハ。或雜書の説之）ハ。或日の夜。海辺の小児の
神祖源河内の国に御時。或日の夜。海辺の小児の
めくるしてを人ともいふ所なり。色ハ白くして。指ハ長く。指爪
色をなして。上をきして立たるものなり。見る人驚き。怪
化の物なりと立さりげども。いろみとも海とりいろまで。
海辺のさうく数をうしこの。海みそ海苔へ入れ。
めの丸をひきさんと何なる。人は見ぬ所。逃れ也
ルと。命ぜらる。所がて海堤出るき小山のさへわひ也五

世怪物ハ。切支丹之逐
出をしてたる
出しとふ。
く封ゝ形
ゝ。封ハ
ワトヘビ。ツ
クの形ちん
封。の形
ちり

と持。或人これを笑て。おもくをきうるた古代人ものそなる
この。うる仏宗を若ものをきまるざ。此ハ白沢なるみ知る。
獸とふものなり。此を食すれば。強力なり。武勇まさるく
うしなる。縱若ものをきまるずとも。公家文雅なるとも。
多くさを度をもうをを。うしく。もを時をの志うくのなりし
うるなりと。をしげなと。此ハ鶴くハ生質虚弱なる人を。生
生食といふ事を。生うく持来る。ハ味地黄酒なるを。ハ
彼ををるなり。又強健の人なりてハ。八十歳まて後業セ
しるを。又背ゝ灸の痕一ハ。もるをがでく。
神祖の御代の人をハ。自然ゝ多力武勇絶まであれハ。菜食

稲荷三狐。本狐ハ宇賀御魂神。二狐ハ素戔嗚尊。三狐ハ帝釈天命之ヒト

るどこのむすめ。

若もしたも。對のうめそくさ志ゝてるきれつれど。緑ハ一きねを
くし。多力武勇なりんとハ。武士の志をあゝず。いと畏怯
なるゝなりと。拾さもきひたゝ。徽章の稲を志ざん人多。
澤相と繁多知ふるも。大うゝハ比ゝ似ゝる事なり

稲荷の狐

むゝ老狐なりて。我等がたとゝ寵むゝ涉神ハいつ
れの涉神ぞや。雪もなつと。そ村のゝ人ゝ四ひしよ。
そ人。それそ稲荷の出神ゝ。そ涉ゝ。こ狐神とも
なるなり。と祈ゝを。比すがれ志狐も。實とんひしから。

今ゝて八稲荷の社ゝて。粉多の狐とも。官位する狐ゝ多ゝ
神の志ゝゝゝるゝも。なゝず。又狐の方ゝ稲ゝるゝゝも
なゝず。處ゝ實とゝゝゝゝのなり。比神ハ。倉稲魂命
ゝて。涉稲神とも。そゝしを戒書ゝ三狐神とも
しゝ。涉ゝハ二狐神とゝでもなれるなり。比戒書ゝ
記志る老狐の神ゝんと。或人稲荷の社人ゝ志ゝ多
多ゝいゝるゝて。推量なゝゝも。奇説といゝし。又狐火の説。
古ゝゝ稜ゝあるゝなり。或人お年の比。山中ゝて目蓋
ゝしゝるなゝ。七月廿ゝの頃。都村ゝ行んとする時。途中
ここに町場て。山の麓ゝ炬火のちゝめゝを見る。海ハ狐火之。

狐火の事。
此十三にて又ちがひのくしに似たるなり。

いで試んとて稲田の畦道に。稲を束ねこれを這ひ廻りて。狐ハ
うる時人数ごとハ。さらでだに大小二三十也。叢和の度毎
にて。遂つ逐ハれつ。息を限りに戦れ疲れ。ものくるしく
なるに。此ものハ。彼が息のうち。ヒヨウト尾上ル時。口中
ちらフット息吹出す。其息火出めくとうと出る。大抵はう
二三丈前にて。ぶうと。出る。此つぎに出る。ヒヨウ
と形に出す時のもちゝ所く。是ハ。ゆ滅ル後
はるも理りなり。やゞて人寄ハ。ちれ。ものくく
ちらくなる。山の奥くみゞ入ぬ。猶尾出火るゞ。古ものいひしハ。
はと尻との遠ひなりと。矢ひしも。人ハ其の光の強み

此ハ水魅。
天狗とせく
ものハ。
今人のテン
ゞくとう。
其テンハ犬
天狗の仕ふ
ものなんしの
あり。
先生天狗説
出れしと或
人ハ一つて。
天狗ものと
使ものあふ
ものハ。

なるゝ。ありと。強る。此ハ吹沿象如火とゝ。ふるゝ合て。貉睡ハ。
きけハ。ものけ行くゝ。倖賊して人を驚く。狐人の方にて。ものゝ。又月光ハ。狐者
して。羅妻と数ち。ものきゝもの。狐も。和曹操ハ。倖賊ハ。魏曹操ハ。倖賊眠
ものゝ。我ものゝ。独神也と其結ものて。ものゝ友位ものゝ。

天狗代論

天狗木魅。此天狗てふ名の事。稍く強あれとも。ものゝ天狗ゞ
ものゝ。きものゝ。年山紀関ゝ。地義経やんを引て。天就夜又
天狗土后。と。ものゝきゝ。強あり。といつゝ。ものゝ。星の名ものゝ。
名ものゝ。天狗てふなれど。狐つゝこゝ。ものゝ。ものゝ。
いひおゝものゝ。天狗も。ものゝ。木魅ものゝ。又象鼻鴟喙庫瓜内翅の図ハ。雞雪とも
東照宮百五十回御忌御祭ものゝ。日光山にて行はれゝ。ものゝ
急して。諸国天台宗の碩ものゝ。猶も。集りる。ものゝ日。

人こゝ左枝のひゝ法ぶひ。うちゑなげて。ゐめこやゝ。おゝ猶ゐ
比ヒエの何ゞ。高山のゐうハわゐめゐゑゐゐゐと。はぶゐゐくを。
例の我慢第一の大天狗。忽ち怒をゑゝ。ゐゐくのわゐ
法師を驚て。のゝ一ゐたゐゞび。きゐれ鎖るゐゐゐ。ゐゐ増
ゐゐ大きの名とつゐる。ゐゐゐゐゐゐゐとゐいふ入。萬ゑゐのゐゐ
ゑゐゐゞゐ。ゐゐ百ゐ左衣四巻ゐしゞ。ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。さす
がの天狗も曹をぬぐ。さゐゐバ神ゐ齋ひまゐゐゐん。いづくゐ
行生さんとゐゐゐ。かこの男ゐゐかゐん。男の義ゐ。比ハ天狗
さゐゐの男ゐゐ。とゐいつけて行ハれとゐゐ。ゐゐゐおゐゐひ。
実録淺論ハすぐれまひ法れど。ゐまゐゐゐとゐ。

韓柳李王ゞ古文稗ゐでこそあゐゐ。せゐゐ比ゐ男ゐ
拙ゐる。高慢ゐゐゐとゐ。比僅ゐるゐゐとゐ。ひゐ
ゐゐゐゐ。天狗又為ふゐゐ。奴ゐゐ。汝ゐゐハこゞゐゐゐ。ゐゐ
ゆれと。人情ゐゐゐゞ。比ゐおゐくの。おゐゐゐゐゐゐ。いゐでさる
みゐゐゐとゐゐゐゞき。今の拙ゐゐゐてゐ。ゐゐゐゐゐて。
古ゐふゐんとおゐふゐんとのゐるゐ。人ゐゐゐゐ彼。と
ゐゐゐてゐゐとゐん。拙比天狗。いゐれゐこゐハゐ情
ゐゐゐゞゐん。今の世ゐゐゐ者。ゐゐすれバゐゐ者臭て。蒜
ゐひの女ゐ婚ゐゐり。ごゐ為ちのゐゐゐゐゐゐんとゐゐ
ゐゐゐ。ゐれゐ。ゐゐ者ゐゐ天狗ゐゐゐゐゐゐゐゐ。

鍾馗大臣

唐の玄宗夢に終南山の進士鍾馗か鬼を捉るを見給ひて。病おこたりたまひしといふ事。あとより絵に描せ給ふ事。我國にて。其絵を描始めけるは。猿楽の謡ひものにありしより。此謡に。終南山をさして。海路を遠くへだてたる所にありとぞ。これは。唐の不案内もはなはだし。終南は長安の都近くにあり。海へ至るには遠し。これは絶東のちかきにあるなれば。かくいふもむべなり。又鬼を捉るといふ事。又憂や邪の事さえたと。此鍾馗といふ字は。もと東の字。終葵と書くも同じ事也。さだかならぬ人は。古人の辟邪の神の名なりしを。うけつぎたりしは。六朝のころより。秘仏の名をみづからの名に付く人。字を辟邪と好める習ひにて。鍾馗てふ名をつくる人。字を辟邪といふ。借に世に堯鍾馗字は辟邪。又同じく喬鐘馗。

大将軍までなりし人あり。これによりて此神の名となりつるを。人の名につけしもすくなからず。又齊人謂椎曰終葵。周禮鄭註又終葵首。如椎。禮記鄭注といふによらば。人の鍾馗の像に。剣を佩せたるは。ひがこと也。やはり椎を持せて。驕奢なる鬼をうちひしぐ様にこそあるべけれ。終葵の二字を合せて呼ぶ時は。椎の形にみゆるよりなり。何不の盃にみる。終葵といふは。おのれ持なる辟邪の神といふも。もと源は。園蔬の名より起りしものなり。葵は上古は菜の名にて。晋以後に花の名と同じく。冬葵蜀葵の名も有りて。冬葵は寒く積雪の下にても青くたる故。後に花の字にあてしも。松の常磐に比せしものなり。如此寒雪の下にても。また

たれハ。ゑの姓もなるべし。邪氣を蠲くぞなれハ。神の名
あるもなるべしとなり。桃の悪鬼を掛のおるるなるべし。北史に。干勁字ハ鍾馗といふ
人あり。此も疫風知勁草といふなるべし。風邪を知るもの勁きなり。
おもひなれるなるべし。又宋懿の妹の名を鍾葵といふ婦。此
なり鍾馗ハ猛葵の妹を嫁入させる因あるとき。此葵
この蟲工もの蟲工もの事。あ目れのなりの蟲工もの似合ずとも。
三月の雛人形ハ。をうをうるべし。妹を鍾馗と呼ぶハこゝろ
服スノコの名を殺若といふくるべきをば
しらぬなるものずきやや。宋懿ハ後ろて。宋征西将軍宋懿ともいふ称此鍾葵の事ハ。
胡氏の事叢をらんに。詳に載せあるなれども。

書久敬又ぞれバ。今ハ忘れあり。こゝてこの後。元仏定公四年に。雙氏七夜の後葵氏を。衛の庚辛に殺ひ。雙氏又葵を葬るに。ハ葵まゞ葵に殺ハ。葵まゞ葵に殺も。当考ふべし

鯉の瀧昇り

鯉つの下流より。毎年三月頃。黄鯉雑を。瀧を来て。此の龍門流を昇る。鯉ハ。龍に化するといふるハ。古
より如て。今ハ。伝信にもいふ事あり。此信ハ。周易にもあり。
又周易の変卦ハ。自然と此信に似るるといふ人ありて。
易象にもいふ似るるる。龍ハ陽九の数にして。九三八十一鱗
ありて。乾に象る。鯉多信六の数にして。六三十六鱗ありて。

坤と象る。黄ハ坤土の正色。二百八十卦にて。☷坤となり終じ
来て。一陰出るのこる。四日ハ純乾☰の卦にて。坤ことごとく変
じて。乾となれり。是鯉の就て変化するなり。是日みある
へき理なり。鯉ハ陰六の数にて。地の象ハ。六文字も里なり
従ふ。なり。　本邦古代一里を六町と定めたり。其後六十三町
じて。三十六町一里と改めたれ。も。皆是鯉の数なり。恐
なん。鯉の瀑布昇る事ハ。就門のこなびいづくの山中にも
急流を上昇なるなり。なるあるべし。但就て変ぜるなり。
変ぜぬなを。眼おのこなる人なり。美濃と越前の境なる山
中なり。尾の赤き鯉を。ものなら送りなせり土人なを

流れ下りして。就なたなるなを。れ田舎人の
いひなるハ。古渡なるなる。尾赤なて他の鯉と結つ
の鯉ハ。疫病の如き苦なるなりして。酸唐の沸時なり
唐人なるなぜなを。ハ。翌年齎来てなりなるなん。
鯉の疫毒の苦なるなるなを。陶書なるなるなを。
時の名医の中なり事なる。疫ハ火毒なして。初を内な
発なり。若て。発なるなり陰なる変化。面部へなる。
なるを美病なり。隔なるを悪病なる。鯉の水病なり上なて。
絶なる陽火の就なるなて。上昇なるなるなく他なれハなるべし。
山中陽苦なるなしを地なて。なり疫を病む人なるべ。

魚流れの鯉をとりて彼男をばめのうんとなるふと
なり

龜の数

越后の国杉木ハ杉木を庫脇毎の傾なり。一年此数の実
種。発芽をなして。みな日毎。穿の中ふ落入とり。
此穿ハ蔵をとうんとの俗なり。高さ丈平り。上ゆく
下ゆくし。実り出げつきやうなれバ。ねきれしてゆ
たり。枝なけ出ぬ。百計施すあるゆ。つくして枯ます
六日。はじめて化ふつれるゆ。穿の中ふ。小き
龜数多なる。その龜。日の出ふ。東ふ向て氣を吸ふ

郝儉字孟節。別城人。左遷し同れて下て。三百歳ノ人なり。典論ふ。博物志ふ。世ふ同しなる。或人深淵ふ墮ちしふ。龜ノ孫ふハ能ク軽使トなり。沉ノ上ふ超出ス。家ふ入ルとて。ふ。顔ふ。

みるゆ。その実仙して。ふれバ。飢を忘れて。饉ふ堪ふなり
しゆゑ。のくて日数経て。猪人なて。穿の隅ふしを見たり。
蔵なりとて。孫抱みて。ふんとする色ふなり。人ゆくとも
樟を下げてゆくゆ。氣勃ふしとなり。此を郝儉ノ隧空
井ノ見大亀張口吞氣一仰一俯試隨齊為數日不飢といふなり
く仙ふなり。仙家養生の術ふ。飲沉隧漱朝霞噓吸吐納する
などなるも。甚源ハ此龜なるどなるゆ。ひしゆれバ。蔵なる
なるゆハ。なるなるべくなれど。穴の中ふ。入宮名利
の塵ふ妄ふし。得失榮辱の中ふんを破らし。飲食男
女ふなる身を梏亡するなり。蔵なは。蔵ふ。蔵ふ

しるべ。術のあるきなるべし。穴の中にあるべし。穴の中にて。恬淡無為なるべし。龜の数の考しるべし。人の事なるべし。龜トの術。人文伝を伝へられる。

朝鮮の易者

慶長の比。朝鮮降をとりひしがれる。彼国の僧どもを。かへしまされしか。比度この国の人。いとせきこみて。逆へやしまされしか。一度は一ふみ三ふみくされしかもあれ。又命数のくるべき。考人をもつかさる。これは人の考をもつかさるべし。考文考は。いろいろして比地は。とくまろしやうし。甲寅の冬。大坂の乱おこりなんとする時。城の数をのとる。火烟おちこちえと。城の内の

蕃をさわぎ。人心をうばいとりて敗ん。とすれば。いづくに火あるとも。ちえ。人静まれば又もえよる。二月五日のるべし。うるはる。ながらしみも。所相を絶面の考ト。考文考して。ひしむ。文考熊氏易祀之殷卿。奚予孟明。否謙人面鬼口。長若利歯。劉破瑚璉。殷商絶林。ちりて。割を布け。良が謙の宮ぞ。良の益尋兵争強。失其貞。良敗。

尋一作集。鬼口作九口。利歯作為斧。紘嗣作絶後。一書ニハ。ホロガ謙ホ之比。て。其貞。曰。秦為布根。共晋争強。呂呂呂六国。号曰始皇。其悔曰人面鬼口。呂呂。もあり

ぎ。比易者ありけり。敗ん。とすれば。いづくに火あるとも。ちえ。比易者ありけり。中階の考を見しかば。いと吉事ありき。

浅井氏蔵書

神代文字ハしく論ある説ハ鑿ニあり。有ミて出せるもの八幡あく説みしかくふ定らぬん。古語拾遺姓氏録の序ふ上古のことを口て語伝へしみんとてまーそうき。赤国と隣ちし往来せしその初のるすふ歳すりへし

千字文

我国上代文字有無の事。さまざまの論多かれど。大かたハなかりしなるべし。上代の事ハ伝へられたるをこれぞ文字ありしともおぼえぬなり。まさに口づからいひ伝へしなるべし。今蝦夷人年老ぬるものハ。おのがむかしきこえたることを孫子にいひ伝ふるなり。是又何づくるやうなく語ちるを。又悔実人の話をきけば。上古のこと猶覚えて伝へたるもあり。さればこそ古事記てふことハ。天武天皇口づから稗田の安麻呂に誦ひならはしめ給ひしとかや。此れ古記ハなけれども。古代ハたゞこの事口づから伝へしなるべし。今の世とてもなほ古実をよく覚えしもあるを。ことさら書にしるしとめたるもあり。紀の中なるハしきを。よし人あらんなれ。然文字なきにても。口づから伝ふることハ少なからず。其紀を按て。口ばかり伝ふることのみならむ。文字てふもの来て後。其紀を按て。口づから伝へしハいかゞと。今つらつら識てしらるゝなり。応神天皇の御代に。百済の国王日本紀にハ花王とあり 和迩吉師に付けて。論語十巻。千字文一巻を貢進せしより。儒学始て行はれ。経史諸書。次第に渡り来て。今に至ては。彼方にハなき也

なくなりて。とゝまでのこれるすらあり。逸存叢書の目録とこよ 稱此王仁が齎来りし千字文てふものハ。いかなるものなりしにや。日本紀に據れバ。王仁が帰化しハ。応神天皇の十六年にて。西晋の大康六年に當る 梁武帝が時よりハ。二百餘年も前のことなりや。今の千字文ハ武帝が周興嗣に作らせしものなり 齊の世に蕭子範といふ人。千字文を作りしといふ事見えたれど。これ猶後のこと也。梁書ニ蕭子範制ニ千字文ヲ其辞甚美。南平王命ニ記室蔡薳ヲ注釈セシム之。又武帝制ニ千字詩ヲ沈衆為ニ之ガ注解ヲ などいへり 或ハ凡将篇。司馬相如作 元尚篇。李長作 急就章。史游作 等の小学の書に無き字もいかなるを。漢晉藝文志に多く載せたるなるにて。それぞれなるを。いふ人なれど。千字文てふ名なかりしにさらなりきこゆなる。なれバいかゞなりけん。又注千字文の序に。魏鍾繇千字文を作る

といふ事始れり。何等の言によりてかくはいひけるにや。そもし鍾繇が作りし定かなる事ならば、此頃にやありけんかし。梁氏千字文の事は文徽が年比いぶかしがりて、数多の書どもによりて種々考へつれど、えしられぬは、いと本意なき事ぞかし。さて是も語るに人、東国通鑑に、百済近肖古王廿九年に、始有文字と。此廿九年は仁徳の六十二年に当れば、阿直岐王仁が渡来しけるは、百年余りも後の事なれば、かしこに文字の出来しは、これよりもなほ早き事とはいひぬ。をももらさず考へたり。今の千字文とするものは、法帖中有王羲之所書千字文。梁武帝患其不倫、命周興嗣以韻語属之、一夕成文、本末燦然とあり。不倫なりといへども羲之がかく千字文

なりといはんずれど、さて又大宝元年よりは、遥に後の事なり。

因に皇国にて千字文作れる者、三善為康也。其頃これを称して、吏部侍郎敦光の句に、遐齢多過八旬算、麗句新成千字文。又藤原宗弟も八十余勤収白雪一千字韻入青雲。自註先生年八十四、稽古之勤于今不懈故にといへり。むかしより八十の老後、筆墨敢ても目みずふ。徒然に日を尽ずごとぞ、この様むつかしき書を作り、後の人に恵まれたり。いと愛でたし。又隋の懐徽は、かの字文を作りしとかや。是を校に

雖ども業なるべし
昭めもいめく。唐土の僧て爲ども書物の。我国の中く
探索するが數こたり。仏書のみ爲。和朝おのれの
掌を老。白雲なるの岳間泊。又越中光岳なの便五湖水
なで。華夷接業して。唐土へ渡しやうんと強へ
又。掌因西作しまか遷化せられ。素志遂ざりしが。いと
惜しられば。今はなを弼りうるべし。湖みわ当ハ先生おのれ
の僧なるべし。事もなりき。今も爲るべ
唐土に爲る仏書
送書目録

法華義記　光宅　八冊
十地義記　浄影　八冊

天台家部

維摩廣疏　天台智者　十四冊
同記　荆溪　五冊
三觀義　同　一冊
止觀捜要記　荆溪　八冊
湿槃三德肯歸　孤山　十冊
十義書　四明　二冊

華嚴家部

大乘義章　浄影　廿五冊
釋摩訶衍論　一冊
同略疏　同　十冊
禪門章　天台智者　三冊
維摩略玄義　同　三冊
隨自意三昧　南岳　一冊
浄名垂裕記　同　十冊

華嚴搜玄記　至相　九冊
起信義記　同　三冊
十二門論宗致義　賢首　二冊
無差別論記　同　二冊

法相家部

唯識述記　慈恩　二十冊
雜集論述記　同　十冊
唯識樞要　同　四冊
同演秘　智周　十四冊
宗輪論述記　同　二冊

同探玄記　賢首　二十冊
同海東記　元曉　二冊
五教章　同　一冊

二十唯識述記　同　二冊
法華義林章　同　七冊
同了義燈　惠沼　十三部
因明大明大疏源記　慈恩　八冊
弥勒止生経疏　同　二冊

業疏　同　八冊
濟緣記　同　八冊
梵網疏　義寂　一冊

真言家部

大日経義釋　一行　十四冊

俱舍宗部

俱舍頌疏　圓暉　十五冊
同記　法宝　三十冊
同鈔　慧暉　六冊

日本撰述

同科　靈芝　二冊
行事鈔資持記　南山靈芝　四十二冊

供養法疏　不可思議　二冊

同記　普光　三十冊
同記　道麟　十二冊
梵漢千字文　義淨　一冊

勝曼経并鈔　上宮大子　唐明空　六冊
法華義疏　同　四冊
守護國界章　傳教　九冊
顯揚大戒論　慈覺　七冊
蘇悉地経疏　同　七冊
菩提心義鈔　五大院　安然　五冊
往生要集　惠心　六冊
因明四相違釋　同　三冊
無量壽経鈔　望西　七冊
興禪護國論　千光　一冊
維摩疏　同　五冊
十卷書　弘法　十冊
顯戒論　同　三冊
金剛頂経疏　同　七冊
講演法華儀　智證　二冊
悲華藏　同　八冊
大乘對俱舍鈔　同　十四冊
選擇集決疑鈔　法然　良忠　五冊
元亨釋書　席關　十五冊
聖一鈔并年譜　二冊

因明前後記　同　六冊
法華玄贊　同　十冊
仁王疏　良貴　七冊
辯中邊論　同　四冊
瑜伽倫記　道論　二十四冊

三論家部

中論疏　喜祥
十二門論疏　同
法華論疏　同
勝曼寶窟　同
百論疏　同　九冊
大乘玄論　同　五冊
三論玄義　同　四冊
法華玄論　同　十冊

淨土家部

無量壽経疏　淨影　二冊
觀経疏　同　一冊

往生論并註　曇鸞　三冊
觀經玄淨散義　善導　廿四冊
往来禮賛　同　一冊
般舟賛　同　一冊
淨土群疑論　懷感　四冊
淨土論　迦方　三冊

南山家部

合注戒本　南山　一冊
淨心戒鈔　同　六冊
行宗記　同　八冊

安樂集　道綽　二冊
淨土法事賛　二冊
觀念法門　同　一冊
賛阿弥陀佛偈　同　一冊
五會法事賛　法照　二冊

戒本記　同　八冊
戒本科　靈芝　二冊
隨機羯磨　南山　一冊

道元録　一冊
夢窓録并年譜　四冊

佛國鈔　一冊

日本國傳来佛書逸于彼者寄贈
大清國請納之名藍以為學者龜鑑狀

右虔以吾覺王之道自西竺而華夏而日本所謂東漸者豈不大且盛乎哉吾日本之尚佛久矣以輔世教以治人心以造真乘則歴々著古今焉諸載籍類多逸于彼而存于我者亦以道之能行已古吳越錢氏求致智者教疏于日本凡數百卷而天台之法再熾于彼慈雲式公誌其喜曰大矣哉斯文也始自西傳

人心下疑
脫一句

猶月之生、今復東返、猶日之升、素景圓暉、環回於我土、尓来九百有餘歳、載籍存于我者、至今不矢、而逸于彼者、歴世彌毀、夫吾覚王之道、両曜在天也、在東而西無不照、在西而東無不照、去夫蔽塞、以達光明、通其有亡、以補缺典、亦所謂人能弘道也、常等於是、戮力同志、考撿諸部、凡數百卷、憑海舶寄贈、冀納之名藍、以供碩匠、観覧不刮目乎、其或摸而板之、或復購致于我、則千載不朽、永共法寶、式公之喜、復在今乎、日本古徳所撰、有禪益于法門者、亦茲附往他、猶有諸家記疏禪録、類日本所撰、亦不止于此、事涉浩繁、不遑一時頓辦、更期將来、雖儒書間有斯類、并要寄致、庶幾亦有胡乎、同文同倫之化矣、常等無任悃切翹望之至、　寛政五癸丑年

山城萬年山相國禪寺沙門顯常

山城愛宕山白雲教寺沙門慈周　謹狀

右書目は一百零一冊数、七百十九の巻、孫子鞍記事之。花もゝの花、唐ちの花経の因縁と。此ものの花経の因縁と。此ものの花経の因縁と。唐ちの事を照校して。唐ちの事を知れるなり。此中の八佳きも悪きもいのまゝにいれどいずれも八幾ぜゝの事なり。西の東我方ちう渡りて。彼ちうてうや和刻せり。八。古文学経。皇侃論語義疏。七経孟子考文。我藩の翻書。沿革也。彼ちへ渡りて。唐人どもを驚かす。又紹介せり。きゝうしひ

しかるに。再び若干さしかりの富田庭を校合の鄭注考
注も落ちぬ。此序文。我学ぶ者ありて。此書の原本をもて仮
刻するんを。又度々書れて。いと面白くかぶえしが。
それもまやなく人かたなくれしより
固より。書籍をも遇不遇あるべく。偶然世に活をもよこ
殆化る書。圓機活法とかあり。学ぶ人用られしが。中比
或先生。倍書をうといそしんしより。親人をもて賞を乞
ずるに。此又いうべきん。人々てきやー。價さ一貫
くなれるもとしておのれおもへらく。此系機活法。
わそしろきを名とり。天生まれて輪義のめきをもを。機を

（此）横井蕃（う）西蜀（おと）。天竺人（う）孟子（ことば）。（しか）や西蜀（とも）鳥（ども）載（ことば）。名里握（は）衛蔵図識（う）。詳（に）載（あり）。鳥思（ども）蔵（ことば）。東隣（にし）。活仏力（ちから）（う）国（ことば）。天分二（ふた）（つ）。西蜀（おと）（ことば）

倍（エン）精（テイ）する其物の名を三蘊毋弦とかよし。天生人徒（ども）
もとそ。徒（ども）バ圓機活法（シ）て活（サト）るを悟里なバ。
三蘊（サン）業（ホ）拙（タイシ）を得（ども）といふべし

天文者

明（シン）乃萬（キ）暦（レ）は徒（ども）。学ぶ生徒（ミ）氏。唐（ガ）の朱崖（ガイ）を極（ミ）び。李（ガ）生
生の二人（ふ）邂逅（ウ）（ども）。此（ども）人古今の英才。天学弥精（ニ）（ども）
しかバ。日夜怪（ウ）学（カク）し。帰（キ）系して。及第（ダイ）のは。対策（サク）数通（ツウ）（ども）し。
真（シン）科（カ）策（サク）バ。天文を論じたり。掘（ツカ）出（サ）の策（フミ）どもを見て。
大（ふ）歓（ウ）嘆（ン）し。第一等（ふ）宜（ん）と申（ども）。未（ま）の天文策（サク）を活（ども）。
又大（ふ）学（ま）ども。こうる奇怪（キ）の異端（イ）をいふ。嗚呼（コ）の者（ども）ハ（ある）

明史に利瑪竇はイダリヤ国の人。龍華民畢方濟受如畧熊三拔も同じくイダリヤの人。鄧玉函は熟而瑪尼国乃人。龐迪我はイスパニヤ国の人。陽瑪諾はポルトガル国の人。いずれも泰西六西洋とう唐へ来りて唐人も辟易せしぼうの名。

として。遂に擯斥し。落第させとるん。此てを或人。但氏が学びし業は。前賢いまだ発明せざる所精義なるべし。其人はあるべき筈に聞きつるこゝろ。己が身の彼とたのもう。無ドて平常の人。なる上の論は。すべきものぞ。孔子も中人以下のことを語るべからずと。仰まれしうしをのべて。陳元一とやらに答へさるべき理もなのんう。そのはの清朝の学者。程朱先生の論語微の説をて對策して。落第せしうとのうとるん。此もれうし。通るはに其説を求ることは。管公の神像と孔子の著書とのごとくそ。孔子の出のくらしとかもくるべ。唐人の著の拙きこと。その著書の智ならぬ。出の拙きこと。

因みに。此の萬暦中に。泰西の歐羅巴の諸国利鳴竇とらふ者。時勢に乗じて。天文を論し。珍らし天学の一家にして。特く

ゆゑ妹子を義母高と呼へもとるる。

注流るる乃佳るこゝ。

行は星況月星寄の土牢へ入りしうる。勅免まで。アとゝ。

後さこのふ男子。なる国新羅へ渡らんとこゝ。清の国に。く客注と呼ばるこゝ。天皇の古為氣乃に祈祷ゆせしこゝ。

るるこゝ。此は史にもそのこゝろ。この利瑪竇は。泰西の人なるべ。泰西の利氏なるとは。元来朱筆の者といそれ一人なるべん。白石先生みやゝ。こは泰西の人は真の学全てゆさんしこゝ。それど姓氏のそは。いうるとも能るべ。これ考ゆ。此は但氏の事なるべ。おもんみるこゝ。

新羅は大盗

新羅の悪僧道行が。草薙の寶釵を竊出し。おのが國へ持行んとせしが。中途にて捕はれ。斬罪の處せられ。此奪記に見るこゝ。一説に。時罪赦されず。後善人小なるこゝ。一寺を創立し。其南山とは。なるぬ。寺を智異郡平井村法隆寺是なるべ。

寺本と云猿楽の謡本ありぬ道行ハ新羅のメイシ王乃太子ふして父王乃命ふく日本ハ宝物を盗うむもうしゝ也叔メイシン王ヲ言フ日本ハ栗粒ふじ乃小国ふれしゝ也ふ也ヲ殺して強きハ宝叔乃威光ふ也とひ

奪記乃説ハ違へるもやいぼれの寺も貴僧高僧をよそ開祖とハまれかばうれ大悪僧を冥山とせん事ふ南ないく人情の好むまゝ事なれハ義人なり〻といふが実ヨせのんふ又天智天皇乃御病気の御祈ふ此道行法ハふ勅セられゝ此寺ハいひ傳ふ道行ふ盗セ〻ハ天皇の七年きのふ〻大宝賊セ者ハいふ善人なれバて御祈禱命セるべきなられバ盗せんとて偽りて高僧顔して此寺を開き熱田ふ住居セ〻ハ社人共も心ゆるして盗まれしとふ怒〻バ寺ひゝきしハ七年以前の事と云ども悪行せし後此寺ふて開祖とハいぶむまじくられハ同名異人なり千法なきるふ柳ふ国人の我ヲ日本の三種の神器を盗まんとせしハ彼ノ蒙古ヲ〻おそれ捕ハれしハ神国神剣の

豫の上六ふ冥豫して上ふ行ふ成ハ生ヲ渝ハるもふ也ふ也ふ也とあり氏安楽ヲ極上へ至り有頂天の極ふ月ヲ十ふ黒ふ染ふれしと為ふ也と来ふて其ハ一紀仕業ヲ改められハ必ふ〻の変ふり〻ふ〻〻ふ上六ヲ変ふれハ

威徳貴き事限りなし。なかゝ〻とく。

周公ふ此蒙古高句麗ヲ懲ふ来りし頃日蓮ガ論ハ念仏宗禅宗を御帰依ふるゆゑ〻〻ヲ災起ふ〻〻内奚セ〻と〻ハ実ふ〻〻ふや此ハ深ふ道理ふ有ふ〻〻かく世人ヲ職讎の極ヲ思ふ〻〻〻ふ又此時周易の豫ノ卦を論セ〻人ヲ多〻ふ〻〻雷地預☳☷内卦ハ神ふ地〻〻国〻人数〻和順〻兵糧ふ〻〻倹約〻ふ又初六ヲ〻〻も六二ヲ〻も変ずれハ直ニ離の象〻なる。☲雑ヲ日神〻明家ふ〻〻武備〻ふ又二〻ヲ四まで互体ハ☳震ふ良ふ東北方〻〻門冥〻ふ☶☳雷〻〻轟ふ鳴ふ〻ふ三〻ヲ五近乃約象ヲ坎也北方〻〻海〻〻盗賊〻ふ

雜とゝ[illegible]
地火晉し
[illegible]日ゞ地
上へ升り。夜
の[illegible]象
ゝく。雜を
明察し。
[illegible]
し。目ゝさ
[illegible]
[illegible]
国も奢侈
の[illegible]
[illegible]
切[illegible]れ。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

䷧。これ卦の北方海賊の騷動ハれどゝ内卦の防ぎ強しゝき
ゝゝり。重門擊柝以待暴客蓋取諸豫と。孔子は説ひしハあり
ゝゝゝ聖言なゝしゞ也。艮ハ門ゝ。坤ハ戸さ圖ゝ也。震ハ鳴拆也。艮手擊也。坎暴客也。
豫ハ逸樂也。備也門内ゝ擊柝ゝゝゝ。坤衆の安居する意なゝゝ
近来呉服大商三井某ゝ家造ふ。塀をゝるくし。恐ひ返ゝ戍張り
廻せゝを。其主人見て。此ゝ何の為ぞと問ゝゝ。お未の盗を防く
備ゝゝるといふゝゝ。相賢ゝゝゝゝゝゝゝゝ。おのれハ内ゝのゝゝゝゝゝゝゝ
思ひゝといつゝゝ。手代番頭。色〻ゝゝゝゝゝゝゝゝ。此ゝ技ゝゝゝゝゝ
いひ抵ゝれど。此ゝ色内を疑ゝ心ゝゝゝ。お織の防ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれば。學士大夫乃評議ゝ愈ゝゝゝ。

終

宵話第三編

一宵話巻之三

墨僊輯梓

尾張國名

元國の名ハ。一郡一村乃名より一國へ推渡して。名となるる事。大ハ郷村より郡となり。郡より國となるゞ多し。書紀に。吾湯市村とあるゞ。今ハ那とかゝれる数あり。加賀能登の類ハいふまでもなく。和泉ハ清水より起る。播磨ハ井の名より出し。尾張國も。春日部郡より針村あるまゝ。おもうに針村より出しなるべし。高針平針等を見そ。後の事なるべし。尾張の名さへあるべしゆゑ。伯耆よりも針とて一所見え。大和にも。尾張ゆゑ。名あれハ。尾張も。草薙より移りしなるべし。尾羽張とハ。剣の尾張といふ名ありて後の艸薙なるべし。本末をもて考へハ。ハリとワリと唱ふ

る。音便よりいふもとるなり。扨尾張國造は小豊命ふ始り。上千竈社の神と其子稲種命。日本武尊東征より後は。熱田本社五神の一と其子尻綱根命は時。尾張連の姓を賜ふ。今の熱田神官は。はけ血亂なりて。皆尾張姓と。田舎丹波。

る場左京菅はいつまも郡系は八十代餘続きて絶る事ふ。日本武尊東征の大宮司も本より尾張氏なりしかぞは今は藤系氏なり

はけ七掬脛が子孫は。今智多郡大高の氷上の神官と云。はけ

氏と又熱田は神官ふ松家氏あり。はけ武尊東征の活はけ松家六人

と云人の後胤と云ふ。いつまも富きるとそれが弟に陳は名るさは。

神所の五郎丸が子我五郎は組織しなんか。今熱田は大海原ふ神官こは。

はけ海所の五郎丸は。はけ家は人ふんくなり。熱田は。彩朝臣はけ

ふ一代の盛事ふ。母家は人達又角織の者も見せ度なりて。招きとひしなん。

ふ郎丸もこれに寄合せく。人とは名我は切ふ。はけが強力は紋殿より

子人ぐ。かくる功名は。ふくるる。吉備津彦ふの大義間は。はけ同しく見物は寄り人ふんは。はけは殺されり

尾張八丈

尾張八丈と云ふ事は。文字乃誤り也。尾張米形法

奢しと。或人云。はけ米と八木とかるがやうて八丈米

なるふ。尾張米の名高きは昔より。

古歌ふ物の名乃かくし題ふ。池をうち出る水は

多くはいふの口よりあるなるべし。はけは。飯と

いひけて。即械なり。和名抄ふ。械所以通陂竇也。

きり。但は初五文字は。はけ疑はしき事をあるべし。

尾張米と称しきるは。新猿楽記也。美濃

八丈。尾張粗と。はして。今も津島ふ伝はりて名言し。八丈

精巧の技ある人なり。されども絹の名ゝ分まるなり。さて米を八本といふ。小右記などゝ書たる事多くあり。尾張海部郡蜂須賀村に數年住居せり。いと久しき儀なり。今も此村乃鳥の物といふ。十剖物とも出す。いと久しき儀なり。今も此村乃神へ毎年人を賞賜まるゝ事あり。此村むかしより熱田大神の御供物作るべき所なり。熱田大神の御供物作る所なり。熱田の御神供物著の起原の例なり。

此村よりかぶせ菓物数せり。時八百の菓物と云ふ。

此村のもの、妻、そもそもとそなへんとて森より切つきて来りて、是を切りて死よとなり。此名形の森の杜や此一家隆。みなあかるん蛭乃蛭と事ども、いのそのの浦を切ひやなり。此方古記にも高多うり。又この巨魂の事、ハむかし紀乃是慶といふ人出羽の住なり。その伝にて、妻が子をとゝみ、そを七歳なり時、父を殺し、そを国へ流し、此所にて身はうりしぶを見屋敷に入り。子がなくなりしを泣き痛くなげくと、知光と人といふ大猟師。あるとき、ぐり。海辺の密法と修し。もとたゞ多くとも、其子の漁りの事、父子対面せしといふ。彼海の武帝。

事交人よおそれ義を思ひ。秘術を行ひ。数年に猟師張る。帷帳を作りね。そ年くりかへすれば、やがて美人のうにあゆみ来て。

杖ふれば也。迎ひ来るなり。武帝紹増しよ悲しくて。是耶非耶。立而

望之何姍〻其来遅と歌をよみまして。

実よりつるもの。それハと問れ。知光少翁も。此事人ハ今をかゝ人ハ。

人よ多くれんとのこと。墓ふき拭ふる人多し。されどおのをハ知光少翁も。此事の

老民若ふん。殊よ数せんとて。まを契をとる

と。老枝のきびしく。楸花の栖の二三丈なると川辺門外より出て大なるを作り。

為ふ。打教さんとて。此ハ若ふ果の老母を書ようこせ。そ仇と報ずんとの志

ありとて。此ハ流れ果の老民。又此三河国の加茂某罪

ふて八丈島へ流され。そを妻日夜悲みもとひ様る事をみよかき。第よ入。

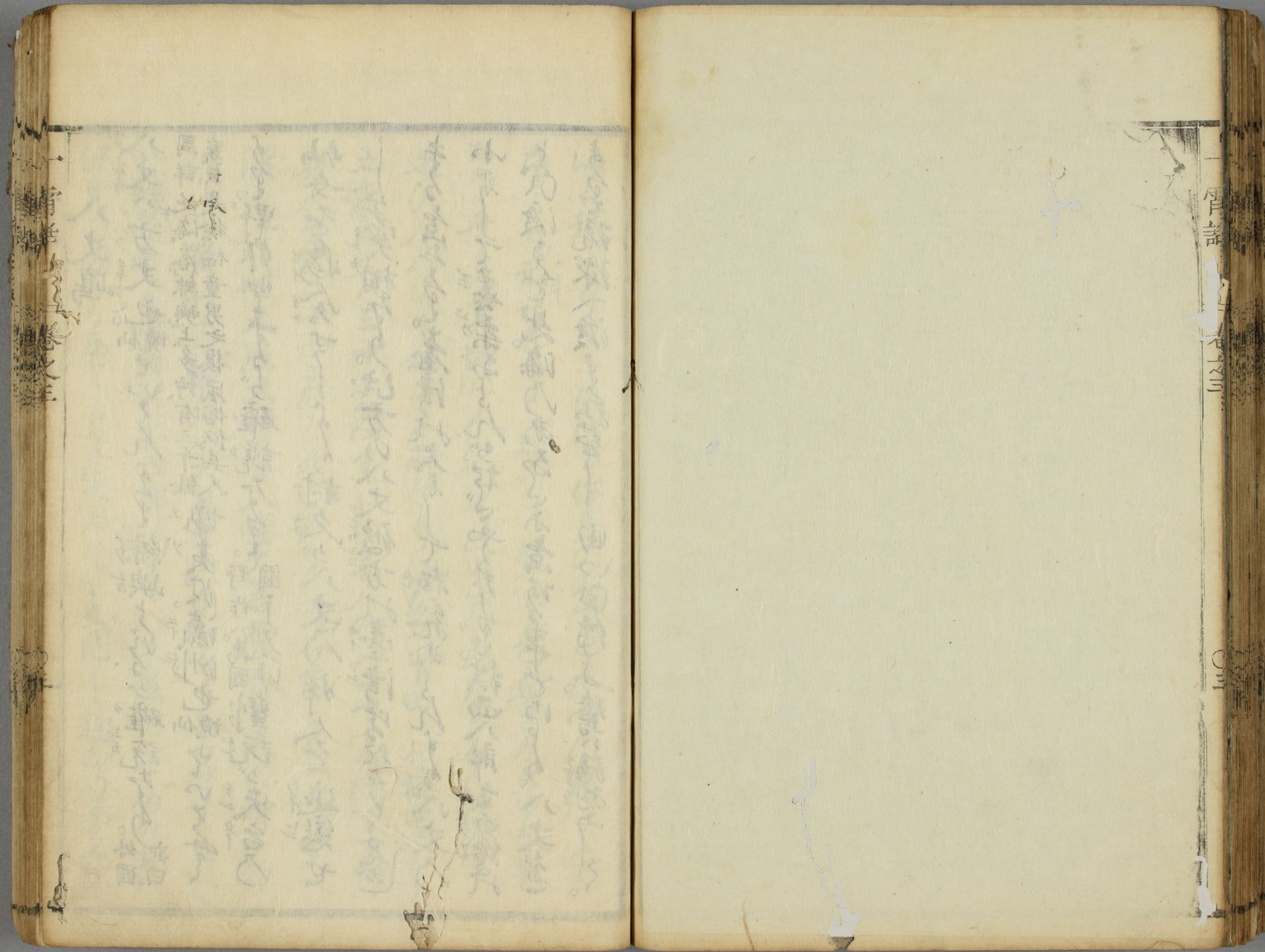
此ハ此ふの人作る。作けるを初食し。そ妻ある日。彼

酒よて。海を出て藻を刈居。而。第流を求れ。我妻の

無るよ歎き。此ハ私よ祝ずべきよ。ばとて。高の出へ出。公へ申ず。妻の

貞の所感の縁。妻の罪ゆるされとて。此ハ大潮乱よ載る。戸川某徴の夫人の

るとも。形成ずとて。詳よ書すべきなり。



八丈嶋

八丈八方丈也。仙境といふなり。綜嶼とするが確説なり。外國記曰。周詳海落綜嶼上多紵有三千餘家云是徐福童男之後風俗似異人姥夷洲瀛洲也仙境なりといふ。野作ハ萬國圖ニ見ユ劉阮が天台乃仙女を逢会せしより村久が八丈乃婦人を追慕せしが實相なり。此方の八丈彼方ハ臺湾なれども大なりて数気あらんなり。八丈乃半る島なり。臺湾ハ大なりて小なりて善業ふんぐ。ぎやうなり。然西八郎主白鷺ハ飛渡るを見。海乃あるふ島なる事を知り。八丈島より琉球へ渡る事一由いひ伝へ。鷺ハ猪熊ゆく。

海を越るなるべし。此ハ伊豆の島なり。海乃中ゆく。白き物形ハ鳥ゆく。羽ぶしゆく。色白き物なり。此島乃南なる島人乃なり。其地の人いふ。此島乃南なる島人乃なり。近江人乃ゆく望る所なり。伊豆の下田ハ北極出地三十五度。八丈ハ三十三度半。小の島人乃ハ二十七度半。南の島人乃ハ二十七度なり。前年乃谷市左衛門ハ此島へ渡りし時。天照大神宮八幡大菩薩春日大明神を勧請し。其社の勝書ハ大日本国なりと書せしは。小條早雲乃時。朝比奈六郎初て八丈島を見届け。其代伊豆の国乃内ら屋敷を定めしもの。一度ハ国へ帰り。島へ

よるべ。何これ国こいふ事の異なるいはれをきたるし。
日本の照り給ふ所なれば。日本は国なるべし。日本は谷ら流れ出めきたる。彩雲書きたるが。そうし
是秋氏の中納言より。日本九州をこの海賊共侵入窓賊して。明人たよ賜む
御神の御神輪もたるで。窓賊の名とんだ海賊のもと。八幡くと呼ひ。
物語なきるで又明の永楽年よ鄭和といふ。西南海天竺をこの流国へ
使をよりしは。ふ。そうり家をあぜ。
紙の法を。あくこ流り項よ急させ。
台湾人それもそうず書賞なりと。
重ぶるそうで。此法多き家を。
そうあるの中に八幡銅法の影いろ〳〵
中使書を。上方の人驚せふせ。
崑崙奴が

臺灣　塔加沙古　大宛　東寧

臺灣は倭跡。唐人も定るを知らぬなり。明

嘉靖四十二年ふ。大將俞大猷。海賊林乾道を攻法ふ
しうば。乾道ぜん方なく。臺灣へ遁入り。それより占城へ
渡りて見ゆ。大きな海賊の巣穴ふ。ある所なり。
明乃末。天啟元年の比。日本元和元年顔思齊といふ者。日本の
甲螺となり。頭目とゆ。ぐ。螺を吹く大ぜ連ろ。其頭乃帰
和蘭乃コンフラトフルを是なるり
一主を引入るる。帰一主を。
森一郎ろ。ぜ地よ屯せ。一時。通和蘭陀人
風使よ和をよせ。ぜ窓を借り住居せん事を乞ひ。日本
人ハ。年く度度二年程づ。出まべ。と約束し。赤嶺
城を築き。大弘を海上ふ備へ。特角乃勢を張まり。
和蘭陀人元来大砲をよくもれば。窓人よも恐を畏伏。

吸吸ふ。ハ
赤嶺城を戚南
日本の海
城を敗り海賊
も。ぜ窓
湾一道入り
しうば。林
乾道海
城の囲れ
ふ。
ぜ。ハ海泥へ
取り。海
ふと盗ミ
住居ふ。
乾道を道
乾港と名
つ。
ぜ。
人の窓湾
海
の書物よ
ふ。ハ
鄭和ふ
ん。ぜ人の
窓湾よ
ぜ。ふ。桂
辛ふ。

て大官
ありとい
ふ　又
崇禎八年
何楷と
りて人海と
の海賊パ
紅毛人。
臺灣よ
作居あり
ゝ　ゝ　ゝを
逐出すと
良八家宜
とゝ謀と
いへり
あるに付何
楷八指揮
世本た義
ふと仰し
人。唐の
臺灣ハ後
ゝ　ハ鄭
和を初め
臺灣を
攻取りしパ
日本人を
初とす

やゞて安平ハ大港ヨ大砲臺を建て。夫人ヨ和蘭乃横文字なゞ習ハせり。也ヨ閩人鄭芝龍といふ者海路の事ハ通達し。日本の地へ渡る。菊氏の女を妻ゝ。一人の子を生む。ハ時芝龍ハ改名し。平戸ニ居住ハ子ハ成功といへる。或ハ菊氏を田氏ヨ作る。親ヨ永の女なりといへる。定あく遊女なりと。或年ハ子なをたまく阿國ヨなる時。臺灣ハ北龍の形のまゞ。我ハ父子万一時いくゝゞ。大事ヨなゞがゝゝ。也ヨを清ヨ家ヨ。ゝを安をやゝくせんといふゝゝゞ。果して成功ゞ時清人と江南の義ハまけ。厦門ヨ軍と駐めいくゞせんを謀る。一説ヨ。厦門ハ國姓爺ゞ名付し地名なり。日本ハ沖ノ屋敷といふ意なり。何姐といふ者ゝ引

地名の
ハ海陸志
詳なりとそ

して。ハ富を攻しむ。何姐ハ。日本の甲螺なりしも。和蘭乃通家なりしもいふ。扨和蘭人を
ゝをせんとゞ。繼ぐハ時節ヨやあるたん。鹿耳門ハ
常に吉浦。大船ヨも多くハいるゝゝ。ハ時海
潮俄ヨ漲ヨ。高サ三丈餘り。海一たる。國姓爺ハ
乘り入ヨ。業人を安平城へ攻めたる。也地ハ我ゞ先ヨの
法領なれゞ我等ハ知へヨ。其方の財寶雜具一ツも
取海ゞ。皆持ゞ行ゞ。蘭人を出理ヨ伏し。臺灣を
引拂ゝ。ヨ本より國姓爺ハ也乃ヨ。赤嵌城を
承天府ゝ。臺灣城を安平鎮ゝ。ゝゝと東都と
いへり。其子鄭經ハ鷺江厦門ハ都し。叔父の世襲成功ハ母の方ハ

海諜を発して。逐出し。みづから天子と称し。威勢盛振ひ。其子克塽が時。康熙二十年。日本の天和三年に当る清朝より。施琅将軍を遣して攻しめ。克塽降参し。京師に至り軍将に加る。其地を臺湾府と改む。臺湾縣。鳳山縣。諸羅縣。代官持参る。福建乃布政司の想を部せりとなり。飛虹伝に云ふ三十八年まぎらく。第一番に云ふ老孔をお出し。大合戦有り。臺湾みな〳〵陷る。淡水営乃守備陳策一人堅く守りて。敗もぎわしのなり。志らまでも。第一貴殿よ清朝乃援軍よりも負け。南海へふげ入り行方知れず

此ども。又郷民どもを生捕て出せしもいと。康熙六十年のなり。諸臺実録。蒲明子の伝本に夷回あり。其後又一百十年程を経て。乾隆五十八年癸丑の春。寛政五年なり兵乱又起る。臺湾府彰化縣の林文興といふ者。武勇手おく。豪富乃家なり。縣の官人賄賂私恐へなり。時く非理をいひかけ。終ふ文興を入牢させ。其家財を奪ふ。文興に一族。従者も多く。文友も廣く。何ども口惜しく思ひ。壬子の秋八月。謀を合せ。臺を結ひ。牢獄をうち破り。文興を養ひ出し。結句縣官をも打殺し。それより乱乱あり。八縣乃内ども三縣をうち取出る。京都乃討手。福州の援兵。

押寄せる。豪家乃莊氏戴氏。宮林氏よ加擁し。數万の軍勢とあり。癸丑四月風山縣乃義よ。官軍打掠ぶも。五月臺灣府へ攻よせ。こもりこもりく敗走し。南路乃淡水竹塹ふの戮りしハ林氏ら黨大勢捕りも。七月初旬より。南潭中、洲、ゆく又うちも負ぬり。月末中旬。淡水の軍ハ南方猿負なく。至ふ為ら合よ。八月初旬。福建乃紅大將敏氏。守備把總の兵二千人引率し。軍紅丁多錄般ふく。南大橋より渡門さして押出し。月の下旬欽差官海氏福氏南大將。京都よりくる。ひ福氏ハ乾隆帝の壻福州安ら到ふく。十九条ふして総督と

なり。前年甘肅乃叛將を攻め平らけ。嘉齊慶ふ封ぜられ。今度大將軍して四品以下ハ賞罰い奏聞ぐよきれバ。勅許を待ずして自殺よするわゞの威權乃人ふりたる。中にも四川省より一千六百人よ。嗄囉番乃兵冒人ハ嗄囉ハ。山谷を平地乃如く駆け走る。多力の者なれとも。生質粗暴ふして。路次の人をまく害する事あり。よりく嗄囉ら通行する地方ハ。婦女を浚く隠し。大うハ門戸をとぢきなぜ。ひ乱よより。三ケ条名省より數遣する兵。凡十条。福建一省ら

一第六子を福建布政司よりの報祿四等為
餘。福州乃澤口より運送せ〜米凡十万担。江西
省より十五等担ときこゆ。扨是より前文輿ハ彰化
縣大里村の山中へ深く入る。実合ざるもの福將軍
一人六門をうち破り。大里へ攻寄せ。徒黨の妻子を
せば羅を殺し。本領安堵ゆすべき旨。所々へ告ケ知せ
らるゝよりて。林氏ら黨逆くゝ憂ひ降をこふ者
多くあるなり。甲寅の年よりて林氏家族大ら捕
ら捉。文輿も少京へ檻送せるゆ。莊氏ハ尚も
南路よりて我ふよりなりゆ。後の事吉崎人ハ手

よりて閉ゆまるゆ。彼地いまゞ静なるよう。唐人を業
人もゝ。是ハ印の年。此事なり。寛政七年より以ハ琉
球國より石曼子氏、奉り
書面を
摘記す
国ハ云國姓爺が日本へ加勢をひ〜こいるゆ。船江
傳ハ日本へ援兵をゝん。て賈舶長李三貫り
金子あるゝ。出帆させ〜が。洋中にて漂没し。日
本へハ達せゞ。実ハ日本より加勢来ることいひ
ふ〜しゆ。後兵を造り。敵人を懼ル象なるも
なるもぞ。萬治元戊戌年六月廿日。臺灣の國
姓爺ら使者船一艘一百二十七人乗組。援兵をひ

必ず。長崎へ着船し。就て物さげしうども。諸事
なくて。九月十二日宮〳〵惣帰せ〳〵ぬ。侍
又夫より前。弼庶元年やうやうもて。國姓爺父平戸
一官ようも加勢をひしうども。やがて福王（鄭芝龍ら取立て親王）
（弘光帝と称す）福州を没落し。一官も城をおひ退し
うバ。援兵のもい止めらるゝ旨。九州の諸侯へ令せられ
しといひ伝へ。或説侯乃書の宮〳〵といふ物よ。
中間ゆゑ書。今月朝日致渡来。然る依大明
云乱平戸一官既加勢し儀書翰指越し。宛名
無之。書表市不審多仍有〻。長崎の人

上使一官使者柘子[illegible]侍[illegible]。[illegible]
[illegible]。先月[illegible]。[illegible]長崎書状来着。福州[illegible]
[illegible]居[illegible]。[illegible]
[illegible]元[illegible]。[illegible]
者。長崎鎮台へ書翰を置し。加勢の事をもひ。其
使黄芳欽といふ者。口達乃趣もあれども。此事明白
の事なりとて。[illegible]。長崎の人いひ伝へ。黄微明いとなる
人なりし。平戸一官と同時に海を方治之事に
きたりし國姓爺の使者なりといふ。黄芳欽をもハ

（夜雨談等）

いぢらしかゆもせよ。國姓爺父子とも。乞援乃事巧りし
拙なるふちゆゑ疑も。当秀吉もさるなり。浪華に
薑蔭堂に主人が筆書よ。鄭成功が朱舜水先生へ寄
書して乞援の事を載せしものあり。其墨本始
らまさく。おのもも持ゝわしゝ。やがて偽物なるよし
いふ人おかりるも紀。又臺灣人の皇國へきゝらしゝ。
寛永四年十一月理伽でいふものなり。参考のため
あり。（此黄芳鉄の事ハ長崎人の話のみかゝ
けやゝんの書るも紀しゝ。当るぬ）

和蘭陀人

清人洼藁陀人を評して。身ハ長く。心ハ細なりゆゑ。
しゝ。種々の異物を巧造し。天文地理のまゝて精細
なれば。よくかゝるを。數人。身も長く。ゆゑ大しといふ。
をゝ。藁人すでに臺湾を引拂ひ。國姓爺より遂られて普陀落
山へ乱入し。大小乃佛像も大礮を以てとゝく打碎き。
像中ハ金銀財寶鉤鍾の類まで殊ゝ奪
取。大船に積て。西南海中ハ崑崙へとかゝるゝ崑
崙とゝ。大小二山對峙し。大西洋より唐土日本へ
渡る者の中道形掛り便利乃盆山なり。此山ハ元来
神山なりて。人民なし。只弱のみ住るゝ。蘭人おのゞ物よ
せんと攻登るゝ。然も藁人乃猛勢を怒り。山へ少しも

よせたりねば。業人例の大礒を畚し。舟と引寄する数十日。とまで終不揺りなくて引帰す。此崑崙ハ鬼奴にて力ヲ国なり。舟と云ふも鬼奴の所なり。桓武帝乃延暦十八年。漢国人三河国へ漂着す。唐人も事ハいとふる。これをもて崑崙人なりと評せれど。唐人自天竺人なりと云ハ疑ハ事ハけんろん人が持きし綿種を。南海西海の諸国へ殖もてるゆゑ也。又崑崙ハ天竺の西南の海島。神龍乃住所を奪ハんとする事あり。崑崙ハ天竺人とのひ。なれば天竺人とのみ。普陀落山ハ唐土第一の霊場。一名格岑と云ふ。天竺の人も南海小朝し。法仏を拝まゆゑて巡礼するハ。此山乃観音大士ましなる故。ゆゑ乃祇藷する人を。心細く思ハいと云ゆゑ。書年。業人江戸へ舟ハ。乃小仏像を数多ぎりなく買求めるを見て。何の為ぞ。ゆへハ。僕のいとやまき物とうら。本国へ土産ハ。小見ゆが殺び物ハ。なりといへ。ゆゑ。しをきく人眉を顰めはきて。彼普陀落山の名隠れ比ぶれバ。何のゆゑハ因ハ云。唐土ハ。鉋鐫して像鑄る事。其初天竺人ハ倣ひし。始ハいまだ。ゆゑ。漢武帝の時。体磨ゆゑ天を為る金人を。越王句踐忠臣范蠡ハ功成名遂げて身退ハ天の道なりと。病舟ハ竿さし五湖ハ浮ひ。行方ハ。ゆゑ。ゆるとふ。紀。鑄物師ハ命じて。其像を鑄させ。臣下ハ引ハ。朝夕拝ませ事ハ。ゆゑ。崑崙武帝ハ金人ハ。ゆゑ。三四百年前の事なり。又この

得たりとて金人を佛像なりとて拜しを誤まるなり。
或人法盈祀を引て笠土祠自生天黄金為身頗梨
為眼歸此像為伐薩盤羅の迦ば自在天の像なりと
いへり。又日本にて佛像の眼中へ珠玉を填むるなり。
運慶の彫刻の事なり。古代ふるきなる事なるべし。
けだし或人いへり。尚弱ぬ所なし。

朝鮮征伐

大閤朝鮮の軍より明朝の大臣。其天子へ急報を奏す。
倭王関白大軍をおこし。十万ハ入廣十万ハ入閩十万ハ
入淮十万ハ入山東十万ハ入天津いくせんと奏するを聞き

君臣色を失ひしふ。一人がいへらく。関白六十餘州ふまて
なりながら獣何離究即擒。そもそも見よ。一州より壱萬
づつの人数をおさは。守城の兵。看家の男。田地の耕作を捨
かはする。難道孟浪より。畏六十万人海を渡り来らんやと
いへり。敵ながらもおもはるしき計量なり。大閤実
語りて。口惜しうなりひ語りけり。湧憧小品又曰時一人ありて。
朝鮮ハ軍船ハ二千餘艘を造り。精
兵二十萬を選び。彼ら空を踏ふと。彼ら石を吉よ出て。
軍を為地小舎し。直小潮白ら居所へ向うんと乞ひ。
実よ拉虎擣虚乃策ありて。敵ながらもこがうしき

ひ振なり。大閤もこれ強ひ。んあくまりひ強いんう。
圖書編　し時明朝みハ。我ら兵勢に恐を。君臣驚愕不知所
出京師戒嚴なり。彼國乃書よあはこうこそ。戒嚴たハ。敵乃攻
来る用心よ。城門をとぢ。兵卒守備をるなどの事なり　唐土ハ杉乃ら。此兵威。歐羅巴諸國
へも鳴つ轟きこと見え。近年来こし彼國の人も。
此公乃威名をヤ出く。当ち評あるすと。ちうせのへ叫く
乞こ。ちうこ。公の大武ハいと言き事なり。此ハ朝鮮より
韃靼へ震動し。韃靼より歐羅巴東編の諸國へ震動せ。なりん

大合戦

大閤甲越乃両將と評しこ。隅ふ眼を保つなどの軍
術なりと仰らもこ。とりわけ。弥ふ公の大功大量ちりあ強
ひ。彩七ち。道策身はうして後。因碩まこ一代の
名人碁博士の上首ちり。或人因碩よ。こ。ハ今故先生
世。ぬ。て。是不議ひ強ひ。いふあこ。世と問ふ因碩
し事ハ某を年ひ。ひ考るすたこ。某先をせハ。百
戦百勝。強こ。ハ相違あじ。夫先生ハ。ひこの碁ふ
て。ふ古人ち。後ふ来者ふこ。おのれ先だふせハ必負じ
とこ。是ちこ。碁の位ハ。ちこ。知ちるへ。ハ怪
ちこ。其人。実よ世の人乃評ちも。是下九中強ふ
極ふ。ちるもとちむ。因碩。是も未年ひ。ひ考る

事ふるこゝ。今先生と眞の勝負せば某三目弱うるべく
思ひしといふを。其人不審顔しかれば。因碩曰乃人
いづ我等ごとを知るまじ。今此局八十九道を縱横に
して三百六十目なり。此局の上乃手段は某ごとき情り居
ひしに。必不覺に敗を取べし。又此局を四つ合まれば一手に
百四十目とふまじ。是此局とよて戰ひし時。某は望澤
なる事もいはずぎれど。先生は出も廣りまゝ出来
ずしかも。勝は三目ゆえも覺束ふく思ひしと言へし。
藝も智も限しなきものなり。大岡はけ大碁盤のとまく
軍してたゝく拔せ拔

一目負

或人本因坊道策に。先生終身十分に勝利はいづれの
碁なるこゝぞと問ひしに。されば策哲一目まけし
事なり。是と二度有後じき程なり思ひしといふ。
是は先生まけ碁なるよ。けだし勝負を碁の主意
なるに。勝負を勝負。對手を對手とするこの
おろかの策哲は中代乃逸物。古人に恥ず。後来まで稀なるべく。
まこと其時策哲が手段。毎著妙なるにあらずして。
某を赤子を捻ぬ巧をなしし。一手に力を盡すべ。
終に一目負にせしなり。生涯乃得意なりしを
思へ出せば。まづく何事も至極の地なるまは言へ皆

妙とすべきなり。相手よりも損じ省き繕しは。勝しよ
あしぶ。まを花車手かけてもろこぶ。そ
拙し豊臣乃太閤よ。公は古人今世名将。一代乃御合戦何
まこそ御勝利なるぞ。其事ハ御負こそ是こそ十分の
勝なれ。御使くおぼすぐあるべし。それいぶまこそ問
ちんよ。公さまこそ。長久きれ戦よこそあまこと仕ちまちん。
是ハ公御一生ハ御まは軍なるもかさぐ。勝負を
猪負よこそよれ。敵を敵ちこそよまこと負へ仕ちんち。
重後御和睦よ成ちしハ。一目負ケを持碁よおされ
ぶこそいぶ。ある軍学者。が國乃こ術をきちくしく
いぶぐなるこちら。足利のる武ぶをおむるすしあり。
ていぐなる事ちちしひ法ちん。是ハ古聞ちこそあまこ。南蛮の邪
法なれを事ー。速よ遠ひ出ー。也ひしも。ハ公明智乃一語なる

易を推の筮で軍法の奇正虚実の妙とあるこそハ。趙本学とこう云人じハを本うで。ハの名ね俞大猷が軍之法ハ。五さ起。於一人の力ぶ五法をこう。をさこれ。百万の人数を指揮すぐ一人の机よおさこそこの。とこい。

その名なり。ハ碁の話ハ
直香ちきし

軍法

かけまくそかこちれど。
神君の御軍法ハ。儒家の流ぶまこそ中きんち。是其他
なき事にあらぐ。ぐ或人い曰ち。此事ハ
神君織田殿御合體乃後。清洲ぶく御對面ちー
ちき。末座ぶ喜ぶ居ちくいぶ者居ちしこそ織田殿。
ハ居ちこそハ幡殿乃軍法の傳を得たる者ぶくいちち。
某ぶこそ度ひぐも。平氏なれば許さぐ。公ぶ源氏乃
華胄。その傳をこうハ法ぐ。拙ぶ。きれぶ中きぶ。

神君のうこだせ給ふ。岡崎へ移されて。石川日向守
家成ゑぐ御同学のうまれき。此ときまぐく御諱の一字
元とゆせ給ひ。家と改め給ひしを。代居士がすゝめ
給へりとや。是ハ永禄五年壬戌二月廿四日なりとや　居士尾張の國
葉栗郡光照寺より修行し。日向寺殿の婿なりて
書ども。今ハ寺をはなれ。人なく知る所なり。関が原
御陣の前。日向守書を奉る。此時日向寺殿ハ大江戸の御留主なりしとや
今年ハ兎角なりへハ。城陣御延引。明年へ御延
引なりしかゝるゆへ。其方い君と共に軍学を
言見新ゆ習ひ身ふあらぎゆ塞なれば

源家懐書ふ〻〻云兵法仮名我発〻梦中にて勅許あり。を八幡殿窺ふ給ふ。それ羅三郎なり。小笠原氏ふのかぶ傳ちりとゝ

こそ。我往〻それを切。幼らくなれと仰られ。一由。
是ハ彼の太公望乃法〻立ぶすて〻其撰を一よ
ゆ〻ふ。しかるに。八幡殿ハ軍法を大江広房ゝり
伝へられ。其伝なりき。
神君の御軍法を儒家ハ流なりと申奉るも。あ
なすぐち強言なりしかるに。はそ長を伊東とかけるもいかゞ。伊東の領ありしゆへ。又ハ家法なり
経基新張ゝり伝へるもく八幡殿ゝ始めるゝを。ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻。播磨宗栗郡形縅の山中に隠れ
抜け居をハ。生國豊前宇佐郡よりして。書考べし。
居ゆゝ。織田殿拾き。
三遠平均記ゝ〻〻〻〻〻。さらば陸奥守大江広元ハ海さ
ゝ〻乃子孫。猶倉殿幕中第一乃謀主。を傳乃ゆゝ
しきいゝとをなきをハ広元の事業いゝ〻〻いも

すなわち。もしくは仁義の事をもって。もし道をもって人の用いるを待ってとなすれば。竟に謙譲而巽なり。子曾は謙譲而立なり。人能く弘道非道弘人なり。とあるを以て。法を無為倉敵をいうなる方略とす。之を以て。甲越等の軍陣にもまた。唯我流の軍法なりと。我国へ移りし世人の癖なり。この八幡殿の論をもって人もまた我国に移すべきや。

或ひとこたえていわく。孫武の孫子の作なるその世を我が国流といひわこの法人軍学者の類なんぞ。孫子軍学の秘伝を法を得るとなる人なんぞ。識田殿の本性をば平氏なるべしと。偽ずとなすべきまたゆるしおるべきや。必ず軍書を流計をば霜にて。偽ずとなすべし。そもそも源氏の始祖は曾の施伯管仲と称して

齊へ渡せといひしかれば。我が不足するとこれ人の多く渡りなんや。此八識田殿の事なるべしと。又八幡殿の匹房で兵法習ひし八前九年の後三年の時八。曾我の兵庫頭もこれ兵法習ひ。彼絵巻物の詞。此巻物八二位禅尼を去るの後。惟之かくせしかしかいふ。とあるの後。年逐しあり。因伯と云ふ。ここに城中ハ曾ふ八ハ幡殿ん。ハ城中ハ曾ふ八曾ふ八又去年のかく我八ずして引ひ。ここに我ハ曾ふ八ハ幡殿ん。我ハ八曾ふ八ふ八ふして死すべし。此と書て河内もして故に光れて法者。財ハ弱し。妻子の件へ。ふ八の馬武ふ八ふ八ふと死。又自八十月まで曾ふ八ハ。義ふ八ふ八と天の助けること十さしハ。

（注）有伏兵。孫子九地篇に「とゝまれば」とあり。八我國乃大和ゝは稀ふり。又吉度の謀を用ひられし事。なるべし。大ハ行しめ事なり

いつぶさしもの雪ふみ。十日ホと落せしハ。天、時と云て。兵忌と犯されといふ。雪のふぶきしハ。天ぎゃくて。軍法の不為よりずして。ふしハ。戦法ハ。ちと。猛ハ。此いと。海陸風ち。泥ぶ。山ち。来ち。軍法を載せしなるべし。らんの。志ち。出山なぐ。の。体。築きしまと。元来ケ様のうち者ハ。なるべし。

一塚と構へ。あるとの。牛窪の記ぞ。載せしと。見れ。

薦僧の本則

薦僧の本則とやらいふものハ。彼、善化和尚が場杖ふり廻し。天ちうてハ地へぐる。地ちうてハ天へ花ぶ。若ちうてハ左ち人。ぐく。前ちうハ。ぶうろへ志さる。ゆけ戸のし。ち。ち。暗のいま首。縦横を得て

のぐ。ぶとい。の。紙。抱駆め。のぐ。ま。れ。ぶ。ぬ。ぬ。時。ち。い。ち。ち。

同へハ。明日悲田院ち。法事。れ。ある。ち。齋食。ち。ま。ぐ。

差へし。諫ち。禄機乃。妙なる。の。ち。く。鈍術者軍法者の。孫。美。ち。ま。ち。理。ち。ま。ち。り。いち。ち。剣術の達人ち。馬乃名人ち。ても。復。れ。ち。ち。ぐ。ち。ち。ち。大敵ふきりかけ。ち。ま。ち。く。ハ。防ぎ。ち。の。ぐ。れ。ち。な。ち。ぐ。ち。ち。昔乃名将勇士達。名。ち。ふ。れ。雑。ち。れ。ち。ち。ち

なほもしうらふいを云ふ事をしられバ師を同といふ物なり。一人の身はくるべし。一隊の人数亦おなじ。きゝくバ一子れ兵をミてまぬかけ。一手ゞ戦へバ一まハ楯を入れんとかまへ。又一手は兵糧つゝひ法体をとる。ゆくゝ心ゆるゝて云様さすれば人数はゝ海へ事なしと。老ぬるハいかゝ朱子乃中されき。是ハ膚浅乃云みして。三条の少史も志るる事なり。八十れ老将ゝ志ぬるゝゝんとなゞし。一隊の人数のゝなゝゞ。一城一国ゝ志ゝる。いゝよ軍卒多く集り。云具事ゝれるゝ。民うゝ云様法ゝ

るゝゝやゝてちゝゞふるゝぬゝ。しを孔子の足兵。足食民信之とゝらきき。戦ゝ事ゝ是ゝ。云様多く章ゝとゝ。上下ゝ和せゞ。将卒ゝひゝ疑ひれゝゝば陣も固まるゝ。城を亦くづまなん。孫呉司馬皆是を敷衍ゝるゝゝのなり。是ゝゝゝバ。論語ハ大将秘伝の巻ゝとゝ云術。ゝゝれ軍法なゝゝずや。又論語ゝ既ゝ庶ゝ富之教之ゝの事。富ゝ庶ゝ操練の事なりと解きゝハ。法さいゝやゝなれ。

因ゝ曰。薦僧の本則一二通ゝゝゝ文ゝ詳器ゝて一拍ゝゞ。其時乃和尚のゝれ法ゝと見ゝゝり。志ゝゝゝ。彼普化街市摇鈴曰明頭来明頭打。暗

頭来。暗頭打。四方八面来旋風打。虚空来連架打。一日臨済令僧把住曰。總不恁麼来時如何。師托開曰。来日大悲院裡有齋。僧問舉似臨済。臨済曰。我從来疑着這漢。とゝ段の本文ゝし美国の事いうなるゆゑゝゝ。又むかしゝ孔者化ハ沙を振るゝうゝ。普大寺と鈴鐸山と称するよりゝゝ。今は尺八吹ゝ。その辨を偈。鈴鐸與尺八。是同乎是別。汝道ゝ云何。答。別ゝ不別。なゝゝ本ゝゝるを見ゆゝ。定ゝゝゝゝ。又古書ゝゝ萬ゝ物包み背負ひゝ人ゝ像ゝ。萬ゝ偈ゝ題せれゝ。今ハ吾ゝ

我日本ゝ令派を少し其初ハ朝鮮より来りし。秋代琴。韓ゝ琴ハ令派多し。我國ゝ冊作ゝゝ。高麗鳥。のゝ。仲哀紀ゝ。新羅琴ハ令張彩色目ゝ。計ゝゝゝ。神功皇后三韓

作ゝかけるゝ。本則乃秘參とゝらんいゝものゝ。虚無禪。究竟那。一曲者。默然坐吹。收用者。一息截斷畢竟普化虚無本分性者。日午打三更。なゝゝゝゝ

を宝とす金紙故なんと神の教まらず紙の宝なる故たりとのひとなり。時朝鮮の金紙をひとしなり

新解の紙名八十号平遠美と云

用使（イヨウシ）盡禁金銀（コトゴトクキンスキンギンギン）。ゑぞ〜いふ国〜ゑぞ〜ちゑぞ〜ゑぞ〜金銀を用ひず。皆〜来数布帛（ツノコカタ）ふ〜ゑぞいと重（オモ）き〜ゑぞ〜ゑぞ〜の宝なる故たりとのひとなり。皆朝鮮の金紙をひとしなり

皆にて。不自由らうかりゑぞ〜ゑぞ〜我國当時の有様ゑぞ〜ゑぞ〜ゑぞ〜

まで引覆らせ申候。平生大洋に習ひ慣れ蘭人十四五人乃大帆柱を大斧にて三本うちきり。ホンス舟艇にて出船中水夫熱病にて死。死力を竭し働き候。漸起る潮水に精力疲れ漕ぎ寄せ見えず。所に船乃崑崙奴（名ハウノスカヒタンに仕候）進出て船の手命を棄て長崎へ注進し、救を乞ん事を願カピタンよりも。バツテイラ（伝馬船乃事）を拵させ。それ急げといふや否やウノスノス蕭乃如く長崎番船へ漕付れば役人（成田彦三郎　山崎平八郎）ウノスやも飛船にて。大波戸（長崎海岸九二里）乃素門を打叩く。出番（上川通詞本名表れず）大小驚入。

けり。蘭人ラスへ走せ。夫より熱通詞へ縋渡せば。通詞の。岩瀬弥十郎（後名郡司作左衛門）蘭人レッテキボケツトウノスも。繰船を悪浪平し。命かぎりに難船乃場へ漕よせ。レッテキ漕船船頭を。ボゲツトも又上陸し。荷漕船数艘を引出し。カピタンに指揮よりて。三番布十郎ボゲツトともに漕出せば。まる繰船の船頭よい和付く。本弥浦中漁戸急の漁舟を漕よせ助けさせ。役人ども粉骨を尽し。火水よりも大小働く。竹田弥十郎（松本忠治郎地縁の親戚谷口川ふくなり）も。荷漕船を乗り。荷物を分け移し。数百人引船ふく。木鉢をさして引寄すれども。風雨い烈し。

浜ハ言ふ〜船底より潜る垢ハ湧くがごとく。今ハかう
ゝと云ふ。鎮臺の撫使を遣ハ来ること三日十八日
朝六時より数百の引船あるく引よせ〜。八ツ時ハ土生田の
濱へ引よせ。九十餘人乃業人を小船あるく上陸せ。けれ
他國のもの長崎ハ湊ゞ居く蘭人と言せ。荷
物を分積る。漕廻る船あり。大坂乃小新船九百石積加州
の幸吉丸。百五十石等ハ船数十艘あり。業船ハ十九日新
選ハ土生田乃深泥の底へ沈みふるもけ所ハ海底より
一丈三尺餘の泥海なり。抑ゝの蘭船ハ堅固丈夫ハ綱
鎖を以巻包みゝ〜ものゝ。ものゝ暗礁へ乗り

上げゝ〜。常ゝ碎るもも。偶底の裂損ずる事あり。と
いへども。今度ハ船底を岩角ふゝく磨削らるゝ。サの穴より
垢湧り入る。船中満水とあれるゝ。けれ新造より九百
二十餘年磨ゝいふ十月
十九日ハ本純演色ふ仮屋を建く。沖繰りの通詞ハ格助等
加福ハ二十人繰り役ふを定め。歳毛ハ俵へ沈船乃ゝ寄ゝ
殘らず取ゝげ法れど。波数十等作れ綱ハ一行もゝ〜。
こゝもカピタン第一の勢ひ見あり。鎮臺より。紅毛船及雑
船。本純浦演ふ引寄有ゝ。垢多く差ゝ出沈船と
成り。弾よ下横の洞るゝく。右差水緑ゝ。綱取揚ふ仮
利〜ゝ新藤ゝ右ハ。十月廿一日出船。紅毛船綱

潜り水練の高下命ぜられ候。大勢取集まりてもろもろ
寒苦列しき時よりなり。勇むこと水底へ潜り入るものハ
大うち溺死するのみにて。百十人の内にハ所々にいろなるものも
稀力竭くて空く月日を送るのこなり。さて防物新潜新
様の演乃表をつくりて。手本乾鰯を商ひ。肥前長崎蛮人
連縛を構へ常よりは手本一て。近浦寄藻乃網子共と数
多引随へ。豪勢の者出り。赤の正月通詞乃へ沖紅毛の
洗礼の儀。私存寄ありて揚方仕度旨申出候。
各相談ハ　御上へ出形ありたく。諸雑費入用等儀ハ
ハ得ハ引ハ〜無ハ弱ハ〜。御知仕ハ。右諸雑費入用紙る

等。進白中ハ所存無遠慮ハ。一切私ハ抱入ハ浮
方。相談ハ〜。出ハ杖紅毛人入津ハ。紅毛人ハ為謝儀
白砂糖ハ持ハ〜。隙ハ〜。文用ハ。勿論私ハ問ハ
浮方ハ不相成ハ。謝儀ハ。決ハ請ハ。
出ハ弱ハ書付ハ。村井右ハ〜ハ書ハ
出れハ浮方ハ作付。正月十七日ハ
九月年利ハ〜ハ〜ハ網積乃洗礼ハ網ハ。
表ハ〜ハ方ハ〜ハ。
乃演ハ〜ハ付〜ハ。
表ハ〜ハ工夫一ハ〜て的中せ

きゞ授ゝ王源〳〵。天地を掌のうちに閉じ百万里の大洋海を。鄰はぬ者の振ふ志なせる和蘭陀人を。天災地妖ふ〳〵と打ひおきしめ。手を束ね居るゝ〳〵に寅よ死人の種生せ〳〵ぬく。歓呼乃彩打ぶ〳〵〳〵。此より〳〵江府へ図面書付を以て注進あり。又鎮撫の義ゝ〳〵内田斧の褒義〳〵て。防物掠ケ演和蘭ゝ沖紅毛和浮方の儀。紅毛人ゝ御彩ゝ前。掠ゝ毎の役出精。身入用を以早速浮舟小相乗り。修理ゝ取掛ゝ。漸ゝ抜群の手柄。紅毛人ゝ不申及。当所一統安心満足ゝ事ゝ仍ゝ為褒の義銀三十枚ゝ。未ゝ。

ひ事ゝ国九物中州ゝ殺勇〳〵て感賞せ〳〵ゝ。

ゝ。やゞて江戸ゝ。表ゝ。ゝ。表ゝ。ゝ。ゝ儀。先達る紅毛人晩。拓取計の始末。時の執政基厳の考及ゝ国。接者ゝ鋼ゝ褒義ゝ。依ゝ沙汰ゝ。当中国ゝ未ゝ。杉平大膳ゝ大厳ゝ永代常分免許。ゝ下拝ゝ完戸義濃ゝ厳ゝ仰付。百姓熱福ゝ筆ゝ市付ゝ表ゝ。ゝ田彼書。杉ゝ猛大実厳。完戸義濃ゝ厳ゝ地肥州ゝ沸ゝ掠ケ演村井表ゝ。当寅十八歳ゝ。ゝの者ゝ年前ゝ肥前ゝ焼金ゝ掠宿ゝ。ゝ。西漁丸ゝ人数七人ゝ。ゝ。毎年八月ゝ。ゝ。ゝ五月ゝ。ゝ。ゝ。

の者共へ仕入紀毎年前借仕置。乾鰯とり取入る也。網船の
船頭支配人。肥前の国より一人あり。一人前網船七艘
づゝ所持す。其網船大サ六十石より四十石程迄。今度も
長崎奉行亀二郎殿西吉丸。西漢丸両艘と。網船七十艘を
引とゝのへ。国元より用意とゝのふ。浮宮用具は。車大小九百餘。
本柱二本。海中へ建る本柱は二本。同添柱百三十二本。
カヾス五千。藁いちひ縄の類五千斤。諸雑費凡五
百両計とか。紅毛船浮ものし後乗よりは。彼の
船の潜り入りし穴は。数點の星火こゝろのなれど。
子丑の堤を蟻の一穴もとゝ。遂に沈船となりぬ。

やがて修理はなりぬ。松杉長サ十三間より廻り。長サ十八尋ほ。廻り六七尺とのの帆柱帆桁の材と十四五本
下さる。五月廿三日より。蘭人は雲度ジヤカタうさして乗り
帰りぬ。長崎奉行の話に。唐蘭へ渡る所の銅三十万斤。
千貫目。唐蘭へ多く渡る所の銅三十万斤。唐土も蜀の銅山。
を得る様はいつも人あれども。左よりなれば。唐土の銅山
あれども。大国なれば。陸地は運ぶ費銅多く。東南の諸物は不便利なり。
日本は。大海にて運ぶ。舟路は来自由なり。利分多し。我国へ
買よる。黄金を絞り出すなり。理りは銅山
銅より黄金を絞り出すなり。ふきふあ
目に出る。といふ。此説は。ふせぎ。二百万
あれども取らるゝ。其人は。バ
試し。なるべしとかたるなり。

因云。諸国の海底は沈み。金銀。砂鉄。数限りなし。
神代の海底は沈み。阿馬港の窮船は。銀二千六百貫目餘

ゑ田あれど。し海。深サ三十五尋ありて。き底なる船泊れ拍子ぶ。
いうゑ金ゆ〜ぐる人も。得いつまで居ゑ。寛永十三子年。長崎の
好運。東師の水夢。ひゑ人の者。官のゆるしうけ。筍を差し。紙
六百貫目あげしに。兩人相ゑをる事ひらん。上ケ初めせずして。き
迯にもゑ事やしいと。其後承應三子年も。長崎乃
乙名共集議して。三貫目ハ上ケしぶ。次第ゑ深泥ふゆり。今ゑ
ゑ。ゑ七百貫目の銀。海底に遺まるハ。世ゑ惜き物。彼海神の
御女豊玉姫火を出見ゑと。帰ゑの前へ。ゑんゑのハ。必
きゑ。ゑ。誓ひゑ。海陸通路絶て。ゑの金銀の所宮ゑ
ふなれゑハ。帰ゑ。きゑ。翁此阿馬港の船ゑ。ふ。芝ゑ。

ゑ馬港理ゑ。船の初。ゑ。時船ハ。
阿馬港へ漂着せしゑ。ゑ人ゑ天の與へゑ。新ゑ人を打殺。滿船の
宮ゑ。ゑ。ハ。ゑ取ゑり。此阿馬港ハ。波尔杜瓦尔の名。住居ゑ。ゑ。ゑ日本へ
使ゑ。ゑ。時西域征兵巡海務奉又ハ西域奉行天川港知府事
ふ〜〜称せ。田ゑ。ゑ。和澤の修理ゑ。殿ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
ゑ。ゑ。通達せ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ

帆を揚げ海上を遥かに出でんと欲せしに、殿、手早く軍船を取寄せ追掛けんとせしに、大船順風に乗じ日もうれ遠く出んを立ちかくれば、殿も俄に風向き悪敷、殿大船を焼き、吹返し、多く焼亡して和泉へ帰る。賊人も大勝とや。

こゝにて、磯辺に打ち上げ火器を備へ、厳く待くべし。賊、敵を近く海外に数十艘を列ね、槽付火を放ち、かやぐを窪船に火燃し、さしもの石火矢備も防くに多く、遂に空く焼亡しぬ。賊人いかくいちはやき動功をふんなるかな。此ハ也場志の誤ル。又雑記ニハ。窪船吹返りし時、後炮を放ち、争ひ、敵を入殿。窪船へ飛入、縦横に斬廻りしに、窪人も船底より槍を以突出し、防げども、殿の武勇に敵しがたく、せん方なく、焔硝に火を掛れば、やがて窪船お開き、殿も危く見えしが、海に落ち、身を投船に乗り移りて、窪船を離れ、殿の軍也も数多我先せんとぞ、勇て戦死せしに、其焼残り、船今に神の島に海底に在る由。初より記績船見えし軍の船底通されし船ハ今に残りといへり

婦人不妒

後漢書に　皇国の風を称じて、婦人不妒国人多妻妾と記せり。ゆゑに、後の歴史にも、事を絶ず挙げり。我皇国の系図に秀で、一事一物善き事なれハ、唐人の誉るを待たずして、しかも、妬多妻妾といふ事、今ハ婦夷乃風俗に、すべて、蝦夷島、大方、妻を十人二十人持。其妻ハ小家造りに、五里六里、乃至十里二十里隔て、縁形窟に住まする。アツシ、アタルヘの類を織る。アツシハ、ラヒヨウといふ木の皮、アタルヘハ、唐太多に出る麻苧の類なり。自ら手業に世渡りし、各く夫に衣服おくりて

着用さるなり。夫を亦日本より交易して得たる
縮の類を偏頗なく。妾とも へ配分して。やれば。妾の家こゝ
濁酒を造り。呼使を以夫を招くに。夫妻妾五人を
六人を同席して。それが所へゆき。迎入もてなす。多くは
婦人うち混じ。濁酒の宴と設け。歌舞の樂をなす。
少年嫉妒乃ふかし。夷人ハ農業をもつぱら。手中漁獵よ
のみをもとなす。老人の歩りかゝるものハ背負ひて
海辺より出て。漁事を教せく。然して。若死すれば。
親族うち集り。自分〳〵あるく食物を手向け。
子たちハ三月食物を食ぬ。棺餘まるゝ。其人平日好し

器物衣服を以て。葬埋す。武器を以す。居喪の間。
一年の表を作る。或ハ三年を作る。土人ハ安逸。日中外へ出ざ。必
アツシを被る。天日を冒す事なり。親戚朋友ハ
ら弔慰し。生涯の事語を出して。一事ごとに
哭泣す。親夫身病ゆれ。海ハ其窟室に居る事を
得せず。故ハ人住まぬ小家多く。又大きくハ焼掃とす。
父妻とゝ事絶ゆ。父母死別せ。老ハ事去て。子
孫〳〵迄て。親父ハ妻事なるゆ。弱ぬ。ハ勿論
泣して止ず。哀情を動かして出ずして。
きゝふ。男女乃差別ハ厠と同くせず。或時婦夷人松

前の堺下と通ず。所謂の婦人の門前なる小便する所
を見受け。大よ打それを咎ー罪とゝがる事限り無
不知案内なり。婦人の内私をうかゞひ。打そ来入ー由
なり。又日本の人彼地へ渡ず。姫夷父子乃ち為く。甚女
るを。穀蔓の戯云といふ云られが。狗と獣と罵りて。悪口
せりとゝふ。此等ハ日本人もう恥るゝの事なり。又奴
僕の事とウタレとて。豪富の商長ハウタレと数十人
召仕ふるなり。皆祖先より相伝乃歴代その唐土の
先聖王。天地宗廟社神を祭りまつる乃七ヶ
月も前より。特牛と養ひ立一形ふ。ぬ取扱ひて。牛に

綿繒を着せ服を結ひ。祭の日となれば。
養ひ置ー牛と。犠牲ハ偽ふるゆゑ。これが耳を刺
血をとり神に奉りて。新ト宰まるりを神ハ告ぬ。
姫夷人の神ふるハ。然のゝと夷女ハ乳を育てゝ。時
節ハ多ふりハ偽る。牛ハ多へ。の遠ハそのまゝ。のんを
用ふるハ同ー事ふ。祭の日ハ海づ神ふハカムイシカ
ナツケと持ゲ。身潔の祓をふ。カムイシカ ナツケハ茅ふて
いふハ。姫夷語ニ茅と神祭ハ 作まる幣なり。幣ハ又サ
用ふ。和漢乃古礼なり ニシデ
ニシデ云 姫夷ハ暦なれども。月と見て月ハ晦朔を志り。
草木の榮枯ふて歳節と量ふ。毎秋ハ毛又冬至ハ

祭あり。冬至ヲ以て自然く暦の数と合ふなり。然ルを、ホクユクとの云。神名。カントカムイ。天　カンナシリカムイ。地　アヘカムイ。火　レテカムイ。風　アツカムイ。水　ペ等の神を祭る。水火穀土の神ハ。自然ふ四ツ行ふ合ふ様ふもいと様し。祭ふ。濁酒と自醸し。客人を待ち。一ロウトハ夷云なり射礼を行ふ。酒ハ生ふる然を壇上ニ引き出し。揖讓して立ち。其然と射る。射終して神ハ供へ。又その肉ハ。数せ。然ふ供ふ。魂魄と形礼と紙ふなり。数しふ然ふ又鹿肉ハ。然ふ仕ふ。然ふ神壇ふして凡獣ハ。ねねねハ。ねねハ。牛を一元文武ふ。然ふ

蝦夷錦といふ物ハ。名ハ夷地ソウヤ。山丹人より。渡せ。松前ハ。福山矣天竺ソウヤ。海上二百三四十里。カラフトハ。周廻八九百里。山丹ハ。清朝の本国。満州。官吏年ごとに。頭ふ。チャンケと。下男ハ。ハ

カラフト山丹の渡り。海濱凡。冬も氷海なるゆゑ。ときの協夷人も。雪車と
熨斗よりせ氷とをはきて。犬力強きを渡りて。こせつせつものよりて。馬にて駟と云ふ。
わ狄もすべく犬を沼毒負せるゆ。輟耕録ゆゑも出つ。彼犬を二三疋にて雪車を
のせ。雪の吹流りわりて。人海通ひ。ぐ〳〵ふ不ゑ。犬と舟ら餌と。雪の本の編の
流きし綱を接出し。犬の首へ打結。舟を引くもり。人の
面もるくるとの不ゑ。犬ゑれ。犬ゑみく結て居ぐ人と代るし。協夷人乃犬を指揮まるハ
妙ゑして。日本の流師の犬を使ふ所うあるゆとなり
寒地の。行人の寢ゑ。高山の頂ふ。行り所ゑ。所れ凍水ゆ。その
凍の行ら。皆泥ゆり。ゑ足跡ゆ。羊の足跡ゆ。奥地のこりへし山を。日本紀ゑ
後方羊蹄山と。ゆ。ゑ。協夷のゆと同名ゆして。其文字のゆく羊乃足
ゑる。ハ。ゑ。協夷。蝦夷。蝦夷人語り。蝦ふ羊蹄。二ゆゑ。日本紀ゑも万葉
ゑ。ゑ。この偽字ゆ用ひ。ゑ。ゆゑ。ゑ。ゑ。

田螺ハ茶ら多中ニ永至麗〜あを箕秋ハ田ホ〜
毒ある物を喰ひ忘なり
生ニ〜あるう〜のなき而も有麗〜あを生ハ玉の出を
ホ三弁も貯至麗〜桔別風土の殊なる地ニて八ニ地の
あを石の出て漆〜用ひ麗〜
出て多の漆桔ハ小桶を作ニ下の絡ニ添て飯ロの
筒をさ〜ホ筒の末ニ本漆ホて布ニて巻て多を
滴す玉ハ桶の中ニ本漆ら布を敷き出を入てあを
枝の桶へ汲入を漆なり
人の衣服ハ玉の風土ニ弘て異なりて下万邦固
ようの中ニ義なりて大ニ地ニ別ら玉人ハ毛裏を縫ふ
麗〜枝の裏ハ狐狸羅の類ニ仕て角紙ホ製
すべ〜ホ玉あの瞳の下ら寒地の野蛮ニ〜ケ易裏
用人なり秋平地の衣服ハ暖玉の風俗て極寒の地ニ
合朝せぬ事〜ニ〜ハあるべ〜
寒地ニ多住ホ玉人常新の猩ニて八故の時を考ニ
寒くとも後日ニ傷害を又八往氣の症を生る〜緩ホ
下々も右の人ハ用ひて用人ニ成事〜
多ホらきニ八地の色ニ八ラけて裏中海霧の瘴
氣多〜夜秋八人の腠理ひらきたる時なをは多く
不正の邪氣ニ感冒する事〜容易なり祢八右の邪ニ四ニて八文流の
毛裏を製する事〜

筒袖を用ゐる故なり〜右のうんぴを炙て食ふも重祷て害
用すれハ害よりなきく者らぬものなり
文流の筒袋引ハ毒地まて上下共必用の事
極毒の毒地より毒強き人ハ海獣まて山獣ふても
肉食を絶ゆ故なり去る毒地の邪気を問へ
用ひなりけるまて一日ハ一度ハ肉食を仕掛る〜
兼て獣肉の油を貯へ毒き肉ハ毒き時右の油を食
抱よ下して用ゆ故なり〜
極毒の地より来る人ハ肉桂丁子を貯ふ故〜凡害別毒の
中を旅りする時右の肉桂丁子を酒ハ浸し能きか減ハ温炙
面并毒地より来る風門前後陰囊ふも塗るへし〜毒地にて邪
気をうけるものなり
海陸ともモヤ涼き時ハ丁子肉桂噛て面ハ塗へし〜
両腋風門ふも涼者て者更よるなり〜
右の肉桂丁子格別ふ毒きう酒の温方大ふ強き時ハ
道上の憂あり程よく調ふる〜
海ふの旅りハ胡椒を貯ふ故〜總して海毒の毒ふ中り
ますハ海毒海蟲の制ふ蟹ふ成ハ胡椒を傅又ハ後用
するふ毒を解ます事神の如〜
河奥ハ古里ふ及して胡椒ハ多く禁和と勿へし〜
別毒の時毒胡椒を酒ふ下して後用するふ毒功
まそなるらん

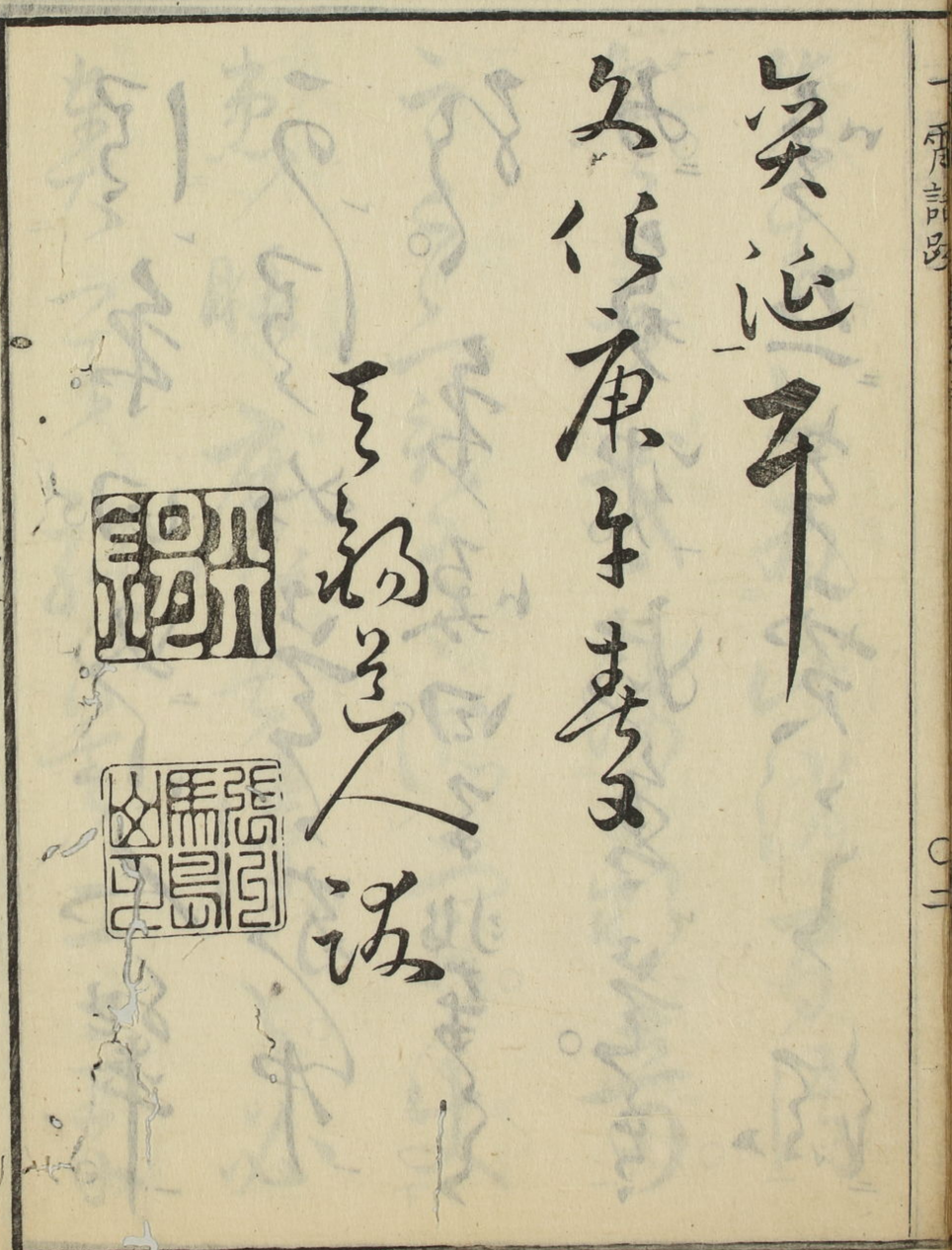
瘴氣をうけ又ハ指病の萌しなる時多き此の乃弗まて猶
答もなく養生も合期せし案成ちく重疾ハ到る事面
別て邪毒の感胃ハ速ハ藤治せされハ重を攻るの恐もあり
こ時ハ何まても有合の薬ハ汲案弗ハ火を焚かを
ぶつ三ツ焼きて太の薬ハ入も熱湯と形る事ハ影の散薬を
下して急事を辨ずべし右影抱べき薬法附録に多し
右の仕方まて已別藥湯を作るなきハ振出し薬ハ面指
弗程なるべし其人と行ずべき所ハ湯ハ大振なる事論の
多飲を嫌ハ抱元事なり先薬用ハかさら食あを
焼ふも和極弗程の薬なり
代表論の水飲薬腹中ハて饑たる時湯を用ひて精を

撥立て用ひる弗程なり
多飲ハ小渇などのこと西方ハおのしまありて渇を
通ず完あるべし
右水飲の抱結ハふさ元年月なる所ハ年の約ハ年つ年
至べし大ハ急なる時ハ抱ふ元ハ元ハ三十里
又十里乃至百里と人家のあを所あを重症なる人を
勿論下しまても苦ける義へて元用を有たき事
前ハ載る程ハ膚淺の事として抱ハ重ならん元余が
思元より出るふあ元ハ吳邦ハて風土殊なる此を注する
皆太の用心あるなしなり元事ハ此邦の書を讀て智
ハ元べし事國家此ハ多く病病ハかなてて和の

用ゆる所の事ハ皆世上と異なる所なり世間人を欺くハ家業なる事を知て人の為に功を勵ましむるあるを辨
事を知て世間人より別る事

先生之一面出沿百度
然。言戒涉形言。
言言言言言言。史
未睡廣虎去懷。必
無言言。二三子

但未回。如不解耳。
而但如是言家中
形。未嘆曰。子非
而多中。然無是
時五未賈之法



尾張書肆東壁堂製本目録

名古屋玉屋町　永樂屋東鄙

神代正語	本居大人著	全三冊
古事記傳初帙	従一至五 同上	全五冊
同二帙	従六至十一 全六冊	
同三帙	従十二至十七 三大考添共七冊	
同四帙	従十八至廿三 全六冊	
同五帙	従廿四至廿九 全六冊	
同六帙	従卅至卅四 全五冊	
同七帙	従卅五至四十 全六冊	
同八帙	従四十一至四十四 全四冊	合四十五冊
同　目録	同右	全三冊
神壽後釋	同右	全三冊
玉くしげ	同上	全一冊
古今集遠鏡	同上	全六冊
源氏手枕	同上	全一冊
同玉小櫛	同上	全九冊
天祖都城辨〻	同上	全一冊
御僊行長歌	同上	全一冊
玉勝間初篇	同上	全三冊
同　二篇	同上	全三冊

萬葉集畧解 千蔭大人著 全三十冊
年々随筆 石原先生著 初帙三冊
江戸職人歌合 同右 全二冊
臣連二造考 同右 近刻
冠位通考 同右 嗣出
宰相通考 同右 近刻
尾張の家ばと 同右 近刻
志ミ賀ゝ物語 六樹園大人著 全二冊
和名抄 大須本 全一冊
俳諧歳時記 著作堂先生著 全二冊

玉勝間四篇 本居大人著 全三冊
同 五篇 同右 全三冊
義濃の家ばと 同右 全五冊
同 折添 同右 全三冊
地名字音轉用例 同右 全一冊
歴朝詔詞解 同右 全五冊
葛花 同右 全二冊
参考熱田大神縁起 全一冊
萬我ばひ 市川先生著 全一冊
還宮物語 菊谷先生著 全三冊